

板 木

群馬県へき地教育研究資料第66集

平成30年3月

群馬県教育委員会
群馬県へき地教育研究連盟
群馬県へき地教育振興会

板 木

群馬県へき地教育研究資料第66集

序



へき地教育研究資料「板木」の歴史は古く、創刊は昭和27年に遡ります。この年は、群馬県へき地教育連盟が発足した年でもあります。今年度で第66集となる「板木」は、群馬県のへき地教育の営みの結晶であるとともに、へき地教育を語る重要な資料であります。改めて、へき地教育の振興に御尽力いただきました多くの方々の御努力に対し、心から敬意と感謝の意を表します。へき地教育の振興につきましては、昭和29年

の「へき地教育振興法」の制定以来、さまざまな施策を実施してまいりました。今年度も、へき地教育振興会への補助、へき地教育センター運営費及びへき地学校巡回図書費の補助、県へき地教育研究大会の開催などの施策を推進しております。また、複式学級を有する小学校に特配教諭や非常勤講師を配置することにより、学年ごとの授業が実施できるようにもしております。

群馬県では、第15次群馬県総合計画「はばたけ群馬プランⅡ」において、「群馬の未来を担う子ども・若者の育成」を政策の第一に掲げ、郷土の誇りと愛着の育成、信頼される魅力ある学校づくり、多様な連携による人づくりなどを進めているところです。へき地校・複式校については、全国的に広がる少子化の潮流の中、学校の統廃合等により、年々減少の傾向にあります。そのような中、県内のへき地校では、地域との密接なつながりを生かした特色ある教育活動を展開するとともに、小規模校ならではの特性を生かした、個に応じた指導の工夫・改善などにも努めていただいております。

今年度の県へき地教育研究大会は、安中市を会場に、「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」をテーマに行われました。班別研究協議では、「学校の特色を生かした教育活動の推進～地域や中学校との連携を図って～」「ふるさとで心豊かに学び、生き生きと活動する生徒の育成～地域及び園・小・中の連携を通して～」が紹介されました。地域にある教材や他地域との交流等を通して、郷土を愛する子どもたちになって欲しいという思いのつまった実践報告となりました。また、授業公開では、確かな学力の育成を目指し、子どもたち一人一人を大切にした授業が提案されました。

このように、へき地教育に関わる皆様の御奮励により、着実にへき地教育の充実が図られております。これらの教育実践は、へき地校のみならず、すべての学校に多くの示唆を与えてくれるものです。今後もこれまでの実践の成果を踏まえつつ、へき地校ならではのよさを生かした教育を、なお一層推進していただきたいと思います。県教育委員会といたしましても、今後さらにへき地教育が発展するよう、関係市町村教育委員会、県へき地教育振興会、県へき地教育研究連盟と連携して、一層努力してまいります。

結びに、へき地教育研究資料「板木」第66集の刊行に御尽力された県へき地教育振興会、県へき地教育研究連盟の関係各位に対し敬意を表しますとともに、各教育機関において「板木」が十分活用されますことをご期待申し上げて序といたします。

平成30年3月

群馬県教育委員会

教育長 笠原 寛

「板木」第66集の刊行に寄せて



群馬県へき地教育振興会は、昭和29年「へき地教育振興法」の施行に伴い、本県へき地教育の諸条件の整備・充実を図ることを期して設立されました。そして、この目標を達成すべく、群馬県教育委員会、関係市町村、市町村教育委員会及び群馬県へき地教育研究連盟とともに、へき地教育に関わる種々の事業に取り組んでまいりました。この間、県当局をはじめ、関係各位の御尽力によって、複式学級の解消などへき地学校における教育条件の整備・充実に向けた取組が着実になされ、大きな成果を挙げてきております。これらは、へき地教育に献身的に取り組まれてきた先生方や、地域において様々な御支援をくださっている多くの方々の御尽力の賜であると心より感謝申し上げます。

本県でも少子化や人口減少に伴う児童生徒数の減少により学校の統廃合が進んでおり、本年度のへき地指定校は32校となりました。へき地校に通う児童生徒の数も減少の傾向にありますが、へき地校に通う児童生徒を見ると、心身共に健やかで、地域をよく知り、地域を好きになる子が増えているように感じます。これは、豊かな自然など地域の環境を生かした体験活動や、児童生徒一人一人の個性や能力を生かしたきめ細やかな教育を推進していただいているおかげだと考えております。

情報化やグローバル化など、子どもたちの置かれている環境は、大きく変化しています。こうしたグローバル化が進展する社会の中では、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先を見通すことがますます難しくなっています。そのような未来においても、子供たちが、変化を前向きに受け止め、人と人との関わりの中で鍛え上げた感性を働かせて、現在では思いもつかない新しい未来の姿を構想し実現していくことができるよう生きる力を育ててほしいと願います。

このたび、へき地教育研究連盟の皆様方が中心となって、本県へき地学校で行われている特色ある教育実践等をまとめた「板木」第66集が刊行されますことは、本県のへき地教育の現状と課題を明確にできるとともに、今後のへき地教育の振興を一層図ることに役立つたいへん意義深いものと考えます。関係各位におかれましては、へき地教育に関する研究や実践をまとめたこの「板木」を十分御活用いただき、群馬県のへき地教育のさらなる発展・充実のために御尽力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

最後に、平素よりへき地教育の振興に御協力いただいております県当局をはじめ、県教育委員会、関係市町村、市町村教育委員会及び各地域の皆様、厚く御礼申し上げますとともに、一層の御指導と御協力をお願い申し上げます、刊行に寄せての挨拶といたします。

平成30年3月

群馬県へき地教育振興会

会 長 星野 巳喜雄

「板木」第66集の発刊にあたって

平成29年度の群馬県へき地学校数は32校です。県下のへき地学校は遠隔地に点在していますが、連盟の活動に横の連携をとっていただきながら円滑に進められています。また、県へき地教育振興会並びに県教育委員会をはじめ全国へき地教育連盟からの支援・協力を元に、県内の全ての学校が充実した教育活動に励むことができます。平素より関係の皆様にはへき地教育並びに群馬県へき地教育研究連盟の活動に対しましてご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

群馬県のへき地学校は、山間部に存在することが第一の特徴です。四季折々の自然の姿の中で、時には厳寒の冬を越す厳しさや春の温もりを感じながら、地域の伝統や芸能は生き続けて、その中で育つ子どもたちは純朴で、素直な心で学んでいます。これは、地域の教育力と地域と共に献身的な教育活動をされた諸先生方の努力のおかげであると思います。豊かな自然の中で育った子どもたちが社会に貢献できるよう、「時代を切り拓く力」をしっかりと子どもたちに身に付けることが私たちの使命です。新学習指導要領の示す「地域に開かれた教育課程」は、へき地の学校が進めてきた教育そのものです。ふるさとに根ざすへき地学校は、過疎化・高齢化・少子化の進む地域と同時に多様化・複雑化した社会の両面の課題に直面しています。この時期にあらためて、へき地教育の良さや課題を見つめ直し、心豊かにたくましく生きる児童生徒を育成するために、へき地の教育的特性をいかした教育課程の編成を行わなければなりません。

「板木」は、県へき地教育研究大会の概要、全国へき地教育研究大会等の参加者からの報告等を記載し、貴重な研究材料を提供する役割も担っています。そして、へき地学校における教育活動の理解と支援を求めた広報的な役割と記録的な役割を持って今に至っています。今年度、第66集として発刊の運びとなりました。「板木」は、群馬県へき地教育の貴重な資料として長年活用されてきています。これまで「板木」の発刊に携わってこられた多くの皆様のご尽力に対しまして、心から敬意を表します。

さて、全国へき地教育研究連盟では、現在、研究主題として「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」を掲げ、平成26年度より第8次長期5か年研究推進計画を進めています。「全国は一つ」のスローガンのもと本県のへき地教育研究大会も全へき連の主題のもと研究を重ねてまいりました。今年度は4年目となりました。共通課題のもと共同研究や年次ごとの成果と課題を引き継ぐ長期研究に取り組むことが、継続的、発展的な研究となり、学校経営や児童生徒の成長に役立っていくのだと考えています。本刊の後半部に、第66回全国へき地教育研究大会高知大会の概要報告を掲載しました。群馬県へき地教育研究連盟としては、全国と連携しながら、郷土を愛し、心豊かにでたくましい子どもたちを育てるために研究推進と教育実践とを進めていきたいと考えています。今後とも皆様方のご指導・ご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

結びになりますが、「板木」第66集発刊にあたり執筆や編集に携わっていただきました先生方に御礼を申し上げますとともに、日頃よりご指導とご支援をいたしております群馬県教育委員会並びに群馬県へき地教育振興会をはじめ、関係の皆様には深く感謝申し上げます、発刊にあたってのあいさつとさせていただきます。

平成30年3月

群馬県へき地教育研究連盟

理事長 飯塚 真琴

も く じ

序 文

序	群馬県教育委員会教育長	笠原 寛
「板木」第66集の刊行に寄せて	群馬県へき地教育振興会長	星野 已喜雄
「板木」第66集の発刊にあたって	群馬県へき地教育研究連盟理事長	飯塚 真琴

第1部 へき地教育の振興

I 変貌するへき地の学校

渋川市立南雲小学校の閉校		1
	渋川市立南雲小学校（前）校長	狩野 俊輔

II へき地の学校経営

〈1〉小学校

心に「学習意欲」の灯をともし小中地域連携教育の推進		2
	みなかみ町立藤原小中学校長	本多 和恵

〈2〉中学校

「地域とともに目指すGive and Givenの学校づくり」		4
～家庭・地域等との連携・協働の取組を通して～		
	神流町立中里中学校長	野口 浩之

III 学習指導の改善に関する実践的な研究

自分の思いや考えをもち、豊かに学び合う児童の育成		6
～児童の実態に即した「めあて 学び合い ふりかえり」の授業づくりを通して～		
	高山村立高山小学校長	牛木 雅人

IV へき地学校における生徒指導の実践

〈1〉小学校

「心豊かでたくましく生き抜く子」を育成する生徒指導		8
～「ウキウキ☆わくわく大作戦」を通して～		
	高崎市立宮沢小学校長	中町 文彦

〈2〉中学校

自ら学び、ふるさと郷恋を愛する心豊かな生徒の育成を目指した生徒指導		10
	郷恋村立郷恋中学校長	地田 功一

第2部 へき地学校教員研修のあゆみ

I 平成29年度へき地学校教員研修の概要	12
群馬県へき地教育研究連盟研究部長 高崎市立倉渕小学校長	小池 政一
II 第66回群馬県へき地教育研究大会	
〈1〉概要	13
群馬県へき地教育研究連盟研究部長 高崎市立倉渕小学校長	小池 政一
〈2〉提案要旨	
《小学校班》	
学校の特色を生かした教育活動の推進	14
～地域や中学校との連携を図って～	
片品村立片品小学校長	樋口 徹
《中学校班》	
ふるさとで心豊かに学び、生き生きと活動する生徒の育成	16
～地域及び園・小・中の連携を通して～	
中之条町立六合中学校長	中沢 博
〈3〉公開授業・授業研究会	
《安中市立細野小学校》	
① 小学校 第3学年（算数）	18
安中市立細野小学校教諭	茂木 信知
② 小学校 第6学年（理科）	20
安中市立細野小学校教諭	山中 豊
《安中市立松井田北中学校》	
① 中学校 第1学年（理科）	22
安中市立松井田北中学校教諭	清水 綾介
② 中学校 第2学年（学級活動）	24
安中市立松井田北中学校教諭	関根勘太郎
III 第66回全国へき地教育研究大会（高知大会）	
〈1〉概要報告	26
高崎市立倉渕小学校長	小池 政一
〈2〉分科会報告	
A分科会	
確かな学力と豊かな表現力を身に付け、主体的・対話的に学びを 深める児童生徒の育成	27
～極少人数による個に徹した教育実践を通して～	
群馬県教育委員会義務教育課指導主事	武川 光

B分科会	つながり合い 学び合う 授業をめざして ----- ～言語活動の充実を通して、考えを深め広げる児童の育成～ 東吾妻町立岩島小学校長 松本 聡	28
C分科会	主体的に学び、豊かに表現する子どもの育成 ----- 片品村立片品中学校長 高桑 実	29
D分科会	自ら課題に取り組み、ともに学び合う児童生徒の育成 ----- 高山村立高山小学校教頭 高橋 直樹	30
E分科会	生き生きと学び合い、主体的に活動する児童の育成 ----- ～とも学びの充実を目指して（算数科を中心に）～ 高崎市立倉渕小学校長 小池 政一	31
F分科会	「話し合い、考え、表現できる」生徒の育成 ----- ～日々の教育実践を通して～ 嬭恋村立嬭恋中学校長 地田 功一	32
G分科会	一人ひとりが主体的に学び、ともに高め合う児童の育成 ----- ～言語活動の充実を目指した授業づくり～ 沼田市立多那小中学校長 小林 彦名	33
H分科会	課題意識を持ち、主体的・対話的に学び合う生徒の育成 ----- ～言語活動の充実を目指した授業づくり～ 南牧村立南牧中学校長 飯塚 真琴	34

《資 料》

I	平成29年度へき地学校資料 -----	35
II	平成29年度群馬県へき地教育振興会役員 -----	38
III	平成29年度群馬県へき地教育研究連盟役員 -----	39
IV	平成29年度群馬県へき地教育センター指導員 -----	40
V	平成29年度へき地教育功労者 -----	41

あとがき -----	43
------------	----

第 1 部

へ き 地 教 育 の 振 興



群馬県へき地教育研究大会 開会式



群馬県へき地教育研究大会 研究協議
小学校班



群馬県へき地教育研究大会 研究協議
中学校班



群馬県へき地教育研究大会 授業検討会

I 変貌するへき地の学校

渋川市立南雲小学校の閉校

渋川市立南雲小学校（前）校長 狩野 俊輔

1 はじめに

赤城山の西麓を流れる沼尾川が長い年月をかけて削りとった谷あい位置する南雲小。地域密着型の学校として、保護者や地域住民の力強い協力態勢で支えられてきた。豊かな自然に恵まれて、里山には県天然記念物「ヒメギフチョウ」が生息しており、地域をあげてその保護活動に取り組み、環境教育の分野で文部科学大臣賞等を数多く受賞している。渋川地区唯一のへき地校として、豊かな自然環境と温かな地域の人情を享受してきた学校であったが、平成29年3月末日をもって、創立144年の歴史に幕を下ろした。旧敷島村当時に南校（津久田小）と北校（南雲小）と兄弟校のように呼ばれ、つながりをもっていた津久田小と統合して、新たなスタートを切ることとなった。

2 学校の沿革

- ・明治6年 横野小学校の名称で創立
- ・明治20年 長井小川田尋常小学校と改称
- ・明治23年 第二敷島尋常小学校と改称
- ・明治34年 敷島北尋常高等小学校（高等科併設）と改称
- ・昭和16年 敷島村北国民学校と改称
- ・昭和22年 敷島村立敷島北小学校と改称
- ・昭和22年 カスリーン台風による大水害のため児童10名が犠牲
- ・昭和31年 赤城村立南雲小学校と改称
- ・昭和45年 校歌制定
- ・昭和50年 開校100周年記念式挙行 「100年の歩み」発行
- ・昭和63年 「南雲ふるさとカルタ」完成
- ・昭和63年 ヒメギフチョウの保護活動開始
- ・平成19年 全国野生生物保護実績発表大会「文部科学大臣奨励賞」受賞
- ・平成28年度 新入生1名 児童数34名 閉校式（3月24日）



校庭の満開の桜と南雲小校舎



ヤマメの放流

3 おわりに

平成28年度の一年間は、閉校のための待機期間と捉えずに、144年目の年輪をしっかりと刻み込むべく明るいビジョンを共有し、児童のみならず、保護者も地域住民も、そして教職員も力強く羽ばたけるようホリスティック（全連関的な）な取組が行われた。ヒメギフチョウの保護活動については、津久田小との合同交流行事として、次年度のスムーズな移管に向けて始動した。70年前のカスリーン台風で犠牲になった児童の慰霊と土砂災害を想定した防災学習、30年ほど前に地域連携で作成した「南雲ふるさとカルタ」を活用した地域住民との交流会、最後の運動会での特別プログラムとして「こどもなぐも万歳」の披露や地域住民と踊る「赤城村音頭」などを実施した。閉校間近の3月には、学校で育てたヤマメを児童全員が万感の思いを込めて沼尾川に放流した。

閉校式では、保護者はもとより、多くの地域住民や奉職した教職員、学校関係者が集い、閉校を惜しんだ。「晴れた赤城の 山ふところに 今朝も 小鳥の音がする」で始まる校歌は私事ながら校長自身が5年生時にできた。校長として、母校でもある地域の学校の終焉を見とどけることは、無常観に打ちのめされる日々であったが、この学び舎から巣立った南雲っ子たちが、「真剣・まじめ・一生懸命」の南雲小の魂を引き継いで、たくましく生きていくことを願いたい。

Ⅱ へき地の学校経営

〈1〉小学校

心に「学習意欲」の灯をともし小中地域連携教育の推進

みなかみ町立藤原小中学校長 本多 和恵

1 学校の概要

校区は利根郡みなかみ町藤原地区。県最北端に位置する豪雪地帯で利根川の源流を擁する山紫水明の地である。旧水上町の4分の3を占める広大な面積の大部分が山林であり、湯の小屋・大芦・須田貝・久保・平出など19の小さな集落が点在する。名湯宝川・湯の小屋温泉、水上高原・宝台樹・藤原スキー場、水上高原ゴルフ場、藤原・須田貝・矢木沢・奈良俣ダムなどを有し、年間を通して観光客も多い。

藤原小学校開校は明治7年、藤原中学校開校は昭和22年。平成20年には、隣接していた校舎を連結し、小中併設校となった。

現在、在校生は小学校10名、中学校6名。職員は小中併せて21名。校長、事務職員、養護教諭、町費用務員等は小中兼務で、平均年齢は約36歳という若い教師集団である。



谷川岳一ノ倉沢へ小中合同登山

2 学校教育目標

【基本目標】

地域を愛し、社会の変化に主体的に対応できる高い知性と豊かな人間性や社会性を備え、心身ともに健康でたくましい児童生徒の育成。

【具体目標】

- ◎自学：自ら課題を解決する知識や能力を身に付けた児童生徒を育成する。
- 至誠：思いやりと真心をもち、物事に誠実に取り組む児童生徒を育成する。
- 気力：たくましい心身と目標を達成するねばり強さをもつ児童生徒を育成する。

3 学校経営の方針

本年度赴任した校長は、昨年度までの歴代校長の学校経営方針を基本的に踏襲しつつ、児童生徒や地域・保護者、教職員の実態の変化に鑑み、学校経営方針の重点を「小中併設校のよさを生かし、地域に開かれた教育活動の推進」によって「学習意欲」を育むこととし、併せて目指す教師像と本年度の努力点を具体的に示した。

〈本年度の努力点〉＊努力点Ⅰ～Ⅶのうち、Ⅱ、Ⅲ、Ⅵの最重要課題のみ記す。

Ⅱ 確かな学力

- ・9年間を見通した小中連携・一貫教育により、学習活動のねらいを明確にし、児童生徒に確実に学力を付ける授業を実施する。

Ⅲ 豊かな心

- ・温かい学級経営と、全教育活動を通じた道徳教育・人権教育を基盤に、積極的な生徒指導を充実させ、いじめ・不登校の未然防止・早期発見解決を図る。

Ⅵ 進路・生き方

- ・学習意欲を重視し、実生活とのつながりを意識した体験的、問題解決的な学習の充実を図る。

以上により、児童生徒はもとより、若い教師集団も保護者・地域とともに学び合い、将来に渡って学び続ける「学習意欲」の灯を心にともす学校経営を目指した。

4 実践の概要

(1) 小中連携・一貫教育の推進

小中の職員が一つの職員室にいるというだけでは連携は進まない。これまでの小中合同で行われてきた教育実践の上に、一層の連携が進み、効果的な教育ができるよう組織や教育活動の見直しを行った。

まず、生徒指導委員会を毎月小中合同で行うとともに、職員会議での情報交換や生活アンケート等資料回覧を通して情報共有を行い、ともに解決策を考えられるようにした。

また、学校評価の際には、校務分掌毎に小中両校の主任が話し合い、関係する教育活動の改善策を提案させた。このことにより、ベテランが若手を指導したり、若手同士が切磋琢磨したりしながら、PDCAサイクルで教育活動を見直すことや、学校運営に参画することへの意識付けを行うことができた。

(2) 地域連携教育の推進

本校には地域と連携した特色ある教育活動が季節ごとに計画されている。地域の農家の方や老人会「千歳会」と連携した「田植え」や「稲刈り」、地域ぐるみの「藤原大運動会」、学習発表会を兼ねた「ふるさと藤原祭」、地域と合同のスキー大会など。また、地域行事へも積極的に参加し、その担い手となっている。「桜の里祭り」に始まり、「藤原湖マラソン」、地域を題材にした「合唱組曲『利根川源流讃歌』歌う会」など。学校近くの「諏訪神社大祭」では、輪番の地区の児童が獅子舞を踊る。每晚練習を重ねて、当日は1曲が30分間にも及ぶ舞いを奉納する。これらの充実した体験活動を、小中9年間の一貫した教育課程の中に適切に位置付け、それぞれの教育活動のねらいと相互の関連を明確にすることで、教科等で身に付けた力を生きて働く確かな力とすることができる。

5 終わりに

今年6月、本町は、ユネスコエコパークの認定を受けた。美しく貴重な自然環境や、そこに生きる人々の暮らしぶりに心を寄せる人は多く、合唱組曲『利根川源流讃歌』もそのような人々の手によって生まれ歌い継がれてきた。しかし、主催者の高齢化も進み、「この流れを引き継いでほしい」という言葉を残して「歌う会」は今回で最終回を迎えることとなった。地域の過疎化は深刻であり、これまで子どもたちを育ててきた豊かな年中行事も同様の課題を抱えていると言える。

新学習指導要領前文「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、(中略)社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現」のため、流れを引き継ぐ具体的な方策を今後とともに探っていきたいと考える。



地域の方と全校田植え



『利根川源流讃歌』歌う会

〈2〉中学校

「地域とともに目指すGive and Givenの学校づくり」

～家庭・地域等との連携・協働の取組を通して～

神流町立中里中学校長 野口 浩之

1 学校の概要

神流町は、群馬県南西部に位置し、奥多野の深い山々と清流に囲まれた小さな町である。周囲には1000m級のいわゆる西上州の山々が連なる。そのため、平坦地が少なく、農地は急峻な地形を活用した段々畑が多く、水田は全くない。合併当時約3000人以上いた人口も、今では2000人を下回り、65歳以上の高齢者の割合は実に57%を超える。



本校は、神流町誕生1年後の平成16年4月に旧万場町立万場中学校と旧中里村立中里中学校が統合して「神流町立中里中学校」として開校した。現在14年目である。

町内唯一の中学校で、統合当時は全校生徒57名であったが、毎年減り続け今年26名。4学級である。そして、今の小学1年生が中学1年生に入学する年には14名になる予定である。

群馬県内3地区で実践している連携型中高一貫教育推進校(平成15年度～15年目)の万場高校と連携を図っており、授業交流、生徒間交流等を積極的に行っている。

地域の教育環境は、自然豊かで古き良き教育風土が残る。三世代家族構成が多い。反面、学習塾等が皆無であり、教育は学校にお任せであり、学校への期待が大きい。

2 学校教育目標

- (1) 基本目標 ふるさとに誇りを持ち、ふるさとで志を果たそうとする生徒の育成
- (2) 具体目標 自立・貢献

3 学校経営の方針

- (1) 知・徳・体の調和のとれた教育課程の編成・実施・評価を適切に行い、教育目標の実現に努める。
- (2) 学ぶ意欲がある生徒がいっぱいの学校づくり (Study)
- (3) 潤いのある豊かな心を育てる学校づくり (Smile)
- (4) 体力と気力が満ちあふれた学校づくり (Strong)
- (5) 家庭・地域との連携による三位一体の学校づくり

4 実践の概要

- (1) 「Give and Givenの学校づくり」の視点

実践のねらいは、「学校での教育に加え、温かい家庭環境、地域の協力といった三者が連携・協働する活動を通して、自分自身のよさに気づき、自分を包み込む“ふるさと神流町”に誇りと愛着を持つ生徒を育成すること」である。そして、それらの活動を通して育まれた誇りと愛着が、“ふるさと神流町”への貢献に寄与する原動力となることも、もう一つの大きなねらいである。これが『地域とともに目指すGive and Givenの学校づくり』である。



単発的な交流授業：音楽

- (2) 地域等からのGivenの取組

- ① 教科指導への地域等からのGivenの取組

ア 交流授業（万場高校）

- ・「定期的な交流授業」として一昨年は数学、昨年は英語、今年は理科の先生が本校に来校して本校の教員とともに授業を行っている。万場高校への親近感を持つ生徒が増えている。
- ・「単発的な交流授業」として音楽では校内合唱コンクール前に音楽の先生に歌唱指導をしていただいた。

イ 地域の素材を生かした教科学習

- ・ 1年生の家庭(食物分野)＝地域の素材を生かした料理 ←神流町食生活改善推進協議会
- ・ 2年生の理科(地学分野)＝地層学習・化石発掘 ←恐竜センター学芸員
- ・ 2年生の理科(生物分野)＝骨格標本作成 ←万場高校水産コース教員
- ・ 3年生の社会(公民分野)＝地方議会の仕組み ←町議会
- ・ 3年生の社会(歴史分野)＝明治時代の神流町の様子 ←郷土史家

ウ 総合的な学習(ふるさと学習)

- ・ 1年生の総合(福祉)＝認知症サポーター養成講座(町役場保健課)
- ・ 1年生の総合(ふるさと)＝「削り華・繭玉」づくり(上野中学校・万場高校とともに)
- ・ 2年生の総合(キャリア)＝職場体験学習(町内の事業所：3日間)

② 教科外活動への地域等からのGivenの取組

- ア 学校行事 3年生海外研修旅行 費用の半額を町が負担
- イ 生徒会活動 万場高校との連携・御巢鷹の尾根への慰霊登山・リーダー研修会

(3) 学校からのGiveの取組

① 地域へのGiveの取組

- ア 地域行事への参加
 - ・ 御荷鉾登山・山開き
 - ・ 町民体育祭 中学生も役割を分担し運営にかかわっている
 - ・ こいのぼり祭ボランティア 設置作業やイベント補助として
 - ・ 神流自然楽校

イ 福祉施設訪問

② 万場高校へのGiveの取組 単発交流授業

③ 情報発信を通してのGiveの取組

- ア 学校だよりを地域へも回覧
- イ 学校HPによる情報発信
- ウ ケーブル放送の積極的な活用



こいのぼり設置作業

5 おわりに

これからの学校運営は、学校の専門性と保護者を含めた地域の願いやノウハウを結集して一つに束ねながら行われることが理想と考える。その姿は、壁やガラスで内側と外側を隔てない「網戸張りの学校経営」「風通しの良い学校経営」と言える。そのためには、教職員の意識改革と地域の方々への啓発が重要である。

学校が、地域貢献も視野に入れ、学び続ける町の拠点・町づくりの中核・町の文化の発信地として、学校を中心とした「スクール・コミュニティ」を創生することが、神流町の未来につながるとともに、将来「いつかは神流町で」と言える生徒の育成につながる。これは『学校と地域の一体改革による地域創生』にもつながっていく。

人口減、少子高齢化、過疎化、地域のつながりの希薄化や家庭の孤立化が進む中、今や、学校と地域は互いの役割を認識しつつ、共通の目標に向かって対等な立場で共に活動する「パートナーとしての連携・協働関係」という認識のもとに取り組んでいきたい。

Ⅲ 学習指導の改善に関する実践的な研究

自分の思いや考えをもち、豊かに学び合う児童の育成

～児童の実態に即した「めあて 学び合い ふりかえり」の授業づくりを通して～

高山村立高山小学校長 牛木 雅人

1 学校の概要

本校は吾妻郡の北東部で、標高530mの山間部に位置しており、昭和58年に東小学校と西小学校が統合してできた学校である。数年前までは各学年2クラスを維持してきたが、少子化傾向に歯止めがかからず、現在は各学年単学級で、全校児童数が165名である。児童は明るく素直であり、落ち着いた学校生活を送っており、保護者や地域の方々も学校に協力的である。

2 主題設定の理由

本校では、授業の中で自分の考えを表現し、他と協力し合って学習を進める「学び合い」を取り入れてきた。児童が自ら学習課題を追究し、他者と協働的に学び合いながら共に学ぶ喜びや成就感を味わわせる学習スタイルへの改善を進めた結果、児童が分からないことに萎縮せず安心して学べる様子が見られるようになった。これらの点を踏まえ、それまでの学習の経験から得た知識・技能（既習事項）を活用して学習課題を追究し解決させる授業を行い、本時の学習で学んだ新たな知識・技能を授業の中で着実に身に付けさせ、次の授業につなげていくことで、「基礎的・基本的な知識・技能を活用し課題解決を図る力」の育成を図りたいと考え、児童の実態に即した「めあて 学び合い ふりかえり」を意識した授業づくりを実践することにした。この実践によって、児童一人一人が学び合う楽しさや喜びを味わい豊かに学び合うことができ、その学びが確かな学力につながると考え本主題を設定した。

3 実践の概要

(1) 研究のねらい

児童の実態に即した「めあて 学び合い ふりかえり」の授業づくりの実践を通して、確かな学力につながるための学びを明らかにし、豊かに学び合う児童の育成を目指す。

(2) 「めあて 学び合い ふりかえり」を意識した授業づくり

① 単元構想シートの作成

単元の初めに単元構想シートで一単元の見通しを立て、授業構想の土台とする。単元のねらい、単元の学習の基礎となる既習事項、単元の学習を通じて伸ばしたい資質能力、めざす児童の意識や姿、単位時間ごとの大まかな計画を作成する。作成にあたり既習事項の定着状況、児童の特性や興味・関心を把握することで、児童の実態に応じた対応の仕方を特に意識し、学級の実態に合った授業デザインを目指す。

② 授業構想メモの作成

単元構想シートの作成で全体の構想ができれば、授業構想メモを作成し、1時間ごとの授業デザインを構想する。本時のねらい、本時の学習のもととなる前時まで学習した知識・技能の既習事項、本時のめあて、主な児童の活動と指導の留意点によって授業の展開を記入する。既習事項をもとにして、何をめあてとして、どのように学び、どんな方法でふりかえるのか、「めあて 学び合い ふりかえり」の一連の流れを意識して記入できるようにした。めあては児童に分かりやすい言葉を用いるとともに、「めあて」と「ふりかえり」がきちんと対応しているかなど、授業で大切にしたいことが見通せるようにした。

③ 高山小授業基本デザインの作成

授業のねらいの立て方、既習事項の確かめ方、「めあて 学び合い ふりかえり」を基本とした授業デザインで、大切にしたいことや留意点をまとめた高山小学校授業基本デザインを作成した。作成に当たっては次の点について工夫を行った。

ア 「めあて」の工夫

- ・ 既習事項の復習を受け、前時までの学習とつながる新たな課題として提示することで、児童の本時の学習に対する意欲が高まるようにする。
- ・ 児童が今日の授業のゴールを理解し、意欲的・主体的に活動できるよう、学習のねらいを児童に分かりやすい言葉で示す。(児童の立場で表現)

イ 「学び合い」の工夫

- ・ 全員が安心して表現し多様な考えが出せるよう、発言の良いところに着目し、認める雰囲気づくりに努める。「分からない」と安心して言える、分かるまで説明しようとする温かい人間関係づくりに努める。
- ・ 全員が話し合いに参加し、関わることができることを目的としたグループ学習・ペア学習など発達段階や学習内容に適した学習形態を取り入れる。

ウ 「ふりかえり」の工夫

- ・ 「ふりかえりの 10 分」を合い言葉にふりかえる時間を十分確保することで習得した知識・技能を活用する問題を解かせ、知識・技能の着実な定着を図る。
- ・ 理解度の差に応じた課題を用意する。すべての児童をチェックし理解度の低い児童へ個別指導を行ったり、学んで分かったことをもう一度自分の言葉で説明させたりする。
- ・ 日常生活との関連のある課題を用意する。
- ・ 感想の発表や、本時で分かったことの確認を行い、考えをまとめたり発表したりして共有する時間を設ける。

高山小学校 授業基本デザイン【算数】

ねらい	伸ばしたい(身に付けさせたい) 資質・能力を明確にする。現れてほしい児童の姿を具体化する。 ねらいを児童の立場から表現したものめあて
必要な既習事項	伸ばしたい資質能力に関わる児童生徒の実態を把握し既習事項や生活経験の状況を把握する。 児童自身が見通しをもって取り組める土台として大事なことを把握する。
時間	授業の過程・内容
	めあて (課題把握)
5 分 位	①既習事項の確認 ○前時までの学習内容と比較して、本時の学習する価値を明らかにする ○追究の見通し、解決の見通しをもつことができるための知識・技能・考え方 ②めあてをつくる (毎時間黒板に提示しましょう) ○学ぶ必要性や必要感をもてるめあて ○まとめの場面での児童の姿を予想し、どのような力をつけるかの視点から決定(整合性を) ○思考を促すキーワードを入れる等の工夫 ③問題を提示する
	学び合い (課題追究)
3 0 分 位	※既習の知識・技能を活用することで課題解決ができることを意識させる。 ④課題を追究する (個別) 一人一人が問題の解き方を考え、解く。 ⑤協働し課題を追究する (考えを発表し、比較・検討する) 小集団、全体など 学級の実態や学習内容に対する児童の理解の様子で学習形態を決定する。 解き方がわかる児童は、友達にわかるように説明する。 説明のよさ 解き方の筋道や解き方の根拠を明確にすることができる。 自分の考えの弱いところに気付ける。 分からないところがある児童は、どこが分からないか友達に聞いて解決する。 小集団学習→一斉学習での発表(解き方を発表し、比較検討する。
	ふりかえり (まとめ)
活 用 問 題 に 1 0 分 確 保 す る	⑥学習のまとめ 言葉による「まとめ」はシンプルに(児童の言葉で)「めあて」との整合 ⑦活用問題に取り組む(自力解決) ○本時で学習した知識・技能を活用して課題解決に取り組む。 ○児童の理解度を考慮した課題解決の工夫をする。(理解度に応じた問題など) (例) 活用問題①は全員、②は理解度別に選択させ取り組ませる。 活用問題① 教科書の例題や、数値やものを少し変えた問題を出題 (教師が○付けて全員の理解度を評価し、個別指導に生かす) 活用問題② 理解度が低い児童には同様の問題を出題 理解度が高い児童には発展的な問題を出題 ○「活用する力を伸ばす詳細資料集」の問題を活用したり、参考にしたりする。 ○数量や図形の「豊かな感覚」の力をつけるため、日常生活と結びついた問題や、文章で解答する問題などを取り入れる。

4 成果と課題

「学び合い」では既習事項をもとに課題を解決するために友達と協力して考えたり、自分の考えを友達に積極的に伝えたりしようとする姿が見られるようになった。また、「ふりかえり」の時間を充実させたことは、問題が解けるまでじっくり取り組む姿勢づくりにつながった。今後は児童の実態に基づき課題解決に対しての意欲付けにつながるようなめあての与え方を工夫したり、学び合いでは安心して自分の考えを表現できる集団づくりを進めたりする必要がある。

IV へき地学校における生徒指導の実践

〈1〉小学校

「心豊かでたくましく生き抜く子」を育成する生徒指導

～「ウキウキ☆わくわく大作戦」を通して～

高崎市立宮沢小学校長 中町 文彦

1 地域・学校の概要

本校は、榛名山南麓の標高360mの山間部に位置している。古くは養蚕が盛んな地域であったが、現在は、果樹・野菜栽培、また畜産へと変化している。年々少子化が進み、本年度は全校児童数38名、家庭数29名である。特に4月に入学した1学年児童は1名であった。3・4学年が複式学級であり、特別支援学級を含め全6学級の学校である。児童は明るく素直であり、何事にも一生懸命取り組もうとするが、自己肯定感がやや低く、自信が持てない様子もうかがえる。地域・保護者は学校の活動に対し大変協力的である。

2 本年度の生徒指導の重点と具体的な取組方針

今年度は「ウキウキ☆わくわく大作戦」【資料1・2】のキャッチフレーズの下、以下の3点を学校経営における生徒指導の重点として職員・児童・家庭・地域に示し、心豊かでたくましく生き抜く子の育成に努めよう考えた。

(1) みんな仲良くいじめのない宮沢小

- ふわふわ言葉・あったかメッセージの奨励
- 読み聞かせ活動の充実
- 校長の「いじめ根絶宣言」と児童による「わたしたちがいじめゼロのためにできること宣言」

(2) 明るく元気できれいな宮沢小

- 明るいあいさつ・元気な返事
- 歌声の響く学校
- 清掃活動の充実

(3) ねばりづよくがんばり続ける宮沢小

- 各種当番活動の計画的実施
- 花いっぱい運動

3 実践の概要

- (1) 高崎市で独自に取り組んでいる「校長によるいじめ根絶宣言」を4月の始業式の中で行った。

また校長室を「いじめ防止推進本部」【資料3】とし、子どもたちがいじめを受けた時の駆け込み寺的な存在であることを説明した。7月の七夕集会では個人の願いを短冊に書くほか、各学級で「いじめをゼロにするためにどのようなことができるか」【次ページ 資料4】を話し合い、それを集会の中で発表し、一年間玄関ホールに掲示し自分たちの活動を見直す指標としている。



【資料1】 玄関ホールに掲示したキャッチフレーズ



【資料3】 校長室の入口に掲示した木札



【資料2】 各教室に掲示した

また平成2年、PTAが「親子20分間読書運動」の指定を受けて以来、本校では読み聞かせ活動を重点的に行っている。一年間を通して朝行事での保護者による読み聞かせ、お昼の放送での地域読み聞かせ団体（おぢばばの会）、そして、昼休みを利用した児童による読み聞かせ活動等、様々な読み聞かせ活動を行っている。読書を通し豊かな情操を育ていじめをしない・許さない学校風土をつくっている。

- (2) 人づくりの基本はあいさつから」と全職員で確認し合い、朝礼や学級での指導等、様々な機会を捉えあいさつの大切さを児童に伝えている。また、『あいさつ組』【資料5】と呼ばれる児童の主体的な活動も本校の伝統の一つである。これは希望者（今年度は32名）が朝7:40～7:50まで校長と一緒に校門に立ち、登校してくる友達や行き交う地域の方々などへ朝のあいさつをする活動である。

今年度は『あいさつ達人の心得』として、①「相手より先に」②「名前を呼んで」③「相手の目を見て」④「笑顔で」⑤「大きな声で何度でも」の5つを心がけ、あいさつしている。

あいさつと同じくらい大切だと考えているのが「歌声」である。本校では昭和56年以来毎年8月TBSこども音楽コンクール【資料6】へ参加し、優良賞を37年連続獲得している。少ない人数で綺麗なハーモニーを奏でるには、一人一人がしっかりと自分のパートを歌う必要があり、ねばりづよくがんばり続けられる心も育てている。

- (3) 本校38名の児童が担当する当番活動には、①ウサギ小屋清掃、②花の水くれ、③あいさつ組（自主的活動）がある。この他に保健委員は毎週木曜日に衛生検査を担当する。ほぼ毎日のように当番活動があるが、子どもたちは嫌がらず決して怠けることなく活動に取り組んでいる。特に花の水くれ【資料7】は、花壇が広くプランターの数も多いため、かなりの時間がかかるが、子どもたちは一人一鉢（一プランター）【資料8】で育てている花々や花壇の花々を大切に育てるため水くりに余念が無い。

4 おわりに

小規模校に限らず学校における生徒指導の基本は、子どもたちの実態や事実を把握し、適切な声かけや働きかけをすることである。本校では「全児童を全職員で育てる」を合い言葉に細かく共通理解を図りながら、気にかけて、声をかけ、心をかけてきた。その成果として不登校ゼロ、いじめに発展するトラブルもゼロが続いている。今後も心豊かでたくましく生き抜く子どもを育成するため、職員一同力を合わせ指導に当たっていききたい。

【資料4】 玄関ホールに表示した各クラスの行動目標



【資料5】 朝の校門付近。あいさつ組の子どもたちの声が響きます。



【資料6】 TBSこども音楽コンクール。本番前、パシフィックホールのリハーサル室です。



【資料7】 朝の水くれ。曜日ごと担当学年が決まっています。



【資料8】 一人一鉢運動。春と秋の二回植えます。↓

〈2〉中学校

自ら学び、ふるさと郷恋を愛する 心豊かな生徒の育成を目指した生徒指導

郷恋村立郷恋中学校長 地田 功一

1 学校の概要

本校は、吾妻郡の西端に位置する標高930mの農山村地域にある。その光景は、南に浅間山、西に四阿山、北に白根山と、風光明媚なパノラマが広がる。そして平成24年度に、それぞれ65年の歴史と伝統を持つ、郷恋東中学校と郷恋西中学校が統合し、村内唯一の中学校となった。生徒数の減少を主な理由として統合した当初は各学年3学級であったが、統合から7年目を迎える来年度には、各学年2学級となる予定である。

現在の生徒数は229名であり、通学区域は郷恋村全域。主な通学方法はスクールバスと徒歩であり、本年度はその約85%がスクールバスとなっている。生徒は、きわめて素直で何事にも前向きに取り組む。

目指すところは、主体的に考え、生き生きと活動できる生徒の育成である。

2 生徒指導に係る方針

(1) 学校経営の方針

- ① 全職員の参画のもと、組織の主体性と活性化を図り、自らの教師力を発揮するとともに、組織力を生かした学校経営・学校運営に努める。
- ② 「わかる できる」が実感できる指導に努めるとともに、生徒が生き生きと活動する授業づくりの工夫に努める。
- ③ 全教育活動を通して心の教育を推進するとともに、互いに認め合い高め合う心情の育成に努める。

(2) 生徒指導の方針

- ① 生徒指導の充実
 - ・ 信頼関係を基盤とした望ましい人間関係づくりと、よりよい学級経営に努める。
 - ・ 「いじめは許さない」という強い意志のもと、温度差のない組織上げての取組に努める。
 - ・ 校内生徒指導委員会の機能拡大と充実に努める。
 - ・ スクールカウンセラーとの連携及び効果的な活用に努める。
- ② 生徒が主体の生徒会活動の推進・充実
 - ・ 生徒の主体性を引き出す生徒会活動への支援に努める。
 - ・ 生徒の自発的学習や自治的活動を盛り上げる助言と指導に努める。
- ③ 授業の充実
 - ・ 自己決定、自己存在感、共感的人間関係等を大切にした指導、支援に努める。
 - ・ ねらいを明確にした授業づくり及び、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業の創造に努める。
- ④ 道徳教育・人権教育の充実
 - ・ 明確な指導観をもつての授業づくりをはじめ、道徳の授業の質的向上に努める。
 - ・ 人権集中週間等、計画的・意図的な取組により、より高い人権意識や人権感覚の育成に努める。

3 主な取組

(1) いじめ防止に関する主体的な生徒会活動の推進

いじめ防止スローガン「千紫万紅～認めようそれぞれの色～」を掲げ、生徒自らがいじめ防止活動を企画・運営する。

① いじめ防止レクの実施

月一回の生徒会朝礼の時間に、生徒会本部役員が企画・運営し、生徒間の触れ合いを主としたレクを実施する。

② いじめ防止ロードの設置

生徒玄関からの導線となる談話ホールに、いじめ防止にかかわるポスターや写真を集中掲示することで、意識を高める。

③ あいさつ運動の実施

毎朝、生徒会役員が、登校する生徒を出迎えあいさつを交わすことで、生徒間の深い交流を図る。

(2) 定例生徒指導委員会の実施とスクールカウンセラーとの密な連携

スクールカウンセラーの専門性に基づく助言・指導を仰ぐ。

- スクールカウンセラーの勤務日に、週一回の生徒指導委員会を実施し、問題行動や不登校、気になる生徒等の確認及び共有とその支援対策を話し合う。
- カウンセリングで得た状況とその生徒への配慮・支援等について、関係職員に伝える。

(3) その他の取組

○ 生徒が主体となる学校行事や学年行事の創造

生徒が主体となって活躍できる行事や場面を工夫・設定し、達成感や連帯感を味わわせ、人間関係の深化を図る。

○ 生徒の居場所づくりとその確保

友人関係等で不安や悩みを抱えている生徒に対応するため、本来の教室以外に相談室を設置したり、対応するための体制づくりを図る。

○ 定期的な「学校生活アンケート」の実施

選択肢や記述部分を含ませながらアンケートを実施し、不安や悩み、ストレス等についての実態を把握し、生徒への支援・指導に役立てる。

○ 年2回のQ Uテストの実施

学級内での担任を含めた人間関係の様子を活用した、よりよい学級経営づくりを創造する。

○ 教育相談週間の実施

教育相談週間を位置づけ、生徒の様子を直接耳にする機会を設ける。

○ 生活ノートを活用

日記としての機能を持たせるなど、相談や秘密などを収集できる体制を整え、担任との信頼関係のもと、適切な生徒理解をはじめ、支援・指導につなげる。



4 おわりに

生徒指導では、教職員が熱心に接していれば自然とその目的が達成されていくものではない。信頼関係に基づくよき人間関係の構築の上に立ち、明確な育成の意図をもつての取組が必要かつ重要である。特に、へき地の特性や地域性、へき地ならではのよさや特徴を十分に理解し、大切にしたい生徒指導に努めることが求められる。今後においても、「自ら学び、ふるさと郷土を愛する心豊かな生徒の育成」を目指した生徒指導の実現に、一層努めていきたいと考える。

第 2 部

へき地学校教員研修のあゆみ



群馬県へき地教育研究大会
細野小 3年 算数



群馬県へき地教育研究大会
松井田北中 1年 理科



群馬県へき地教育研究大会
細野小 6年 理科



群馬県へき地教育研究大会
松井田北中 2年 学級活動

へき地学校教員研修の様子



全国へき地教育研究大会高知大会
全体会



全国へき地教育研究大会高知大会
分科会 馬路村立魚梁瀬小中学校



群馬県へき地教育研究大会
授業研究会 細野小



群馬県へき地教育研究大会
授業研究会 松井田北中

I 平成29年度へき地学校教員研修の概要

群馬県へき地教育研究連盟研究部長

高崎市立倉渕小学校長 小池 政一

1 平成29年度へき地学校

平成29年度の県内へき地学校は、平成28年度末、休校だった2校を含め3校が廃校となったため、加盟校数32校となった。昨年度より児童生徒数は178名減の2,685名、教職員数は10名減の402名となった。へき地学校の児童生徒の占める割合は県内全体の小学校で1.7%、中学校で1.8%となった。

県へき地教育研究連盟では、第8次長期5か年計画の4年次として、へき地の学校の小規模の利点や、地域との密接な連携を生かすとともに、少人数であっても互いに学び合い主体的に活動する学習を通して「たくましく生きる力」を身に付ける教育を推進してきた。

2 活動方針

- (1) 研究主題 「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」
～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かした
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～
- (2) 運動方針
 - ① 本連盟は、群馬県教育委員会、市町村教育委員会、へき地教育振興会等と連携を密にし、へき地教育の充実・発展に努める。
 - ② 本連盟に総務・調査・研究部を置き、広報活動・研究事業の推進、研究成果の収録・発行等を実施する。
 - ③ 本連盟は諸活動を通して、へき地学校教職員の連帯や親睦、指導力の向上、教育の諸条件改善等に努め、へき地教育の一層の充実を図る。
- (3) 活動内容
 - ① へき地関係教育諸情報の伝達及びへき地教育についての理解を深めるため、広報「県へき連」を発行する。
 - ② へき地教育研究大会を、群馬県教育委員会及び群馬県へき地教育振興会と共同開催し、へき地学校における経営・指導上の諸課題について研究協議し、へき地教育の充実・振興に資するとともに、へき地学校教員の指導力の向上を図る。
 - ③ 群馬県教育委員会及び群馬県へき地教育振興会と連携・協力し、へき地教育の諸課題と研究実践を収録した「板木」を継続発行し、へき地教育の充実と発展に努める。

3 研究・研修の概要

- (1) 平成29年度関東甲信越へき地教育研究協議会、8月10日（木）、高崎ビューホテル、群馬県へき地教育研究連盟主管にて実施。各県代表等30名参加。
- (2) 第66回群馬県へき地教育研究大会、10月27日（金）、Aブロック（西毛）で開催。安中市立松井田北中学校・安中市立細野小学校を会場に78名参加。
- (3) 第66回全国へき地教育研究大会高知大会へ群馬から7名参加。11月1日（水）・2日（木）、高知県（1日目：高知県立県民文化ホール 2日目：高知県内6地区8会場）
- (4) 広報「県へき連」第82、83号発行。
- (5) 群馬県へき地教育研究資料「板木」第66集発行。

II 第66回群馬県へき地教育研究大会

〈1〉概要

群馬県へき地教育研究連盟研究部長

高崎市立倉渕小学校長 **小池 政一**

- 1 趣 旨** へき地学校の経営実践や授業実践についての研究協議を通して、群馬県へき地教育の改善・充実に資する。
- 2 テーマ** ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成
～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かした
学校・学級経営と学習指導の深化・充実にめざして～

3 期 日 平成29年10月27日（金）

4 会 場 安中市立松井田北中学校（全体会・公開授業） 安中市立細野小学校（公開授業）

5 日 程

9:00 9:50 10:20 10:40 10:50 12:00 13:15 13:45(小)
13:40(中) 14:30 14:45 16:15

午前 受付	開会 行事	全体 会	移 動	班別研究協議	昼食 休憩	午後 受付	公開授業	移 動	授業研究会
----------	----------	---------	--------	--------	----------	----------	------	--------	-------

6 全体会 全へき連、関ブロ、県へき連報告確認等 県へき連理事長 飯塚 真琴

7 班別研究協議

- (1) 提 案 小学校班 利根郡片品村立片品小学校長 樋口 徹
中学校班 吾妻郡中之条町立六合中学校長 中沢 博

(2) 研究協議

班	司 会	記 録	世話係	指導助言	会 場
小学校	荒木富美子 (大河原小校長)	本多 和恵 (藤原小中校長)	小林 彦名 (多那小中校長)	眞下 理江 (利根教育事務所指導主事)	音楽室 (松北中)
中学校	牛木 雅人 (高山小校長)	松本 聡 (岩島小校長)	埴田 栄一 (応桑小校長)	市村 武文 (吾妻教育事務所指導主事)	美術室 (松北中)

8 公開授業ならびに授業研究会

(1) 公開授業

小学校：安中市立細野小学校 中学校：安中市立松井田北中学校

学 年	教 科	単元・題材名	指導者	会 場
小学3年	算 数	「新しい数の表し方を調べよう（小数）」	茂木 信知 藤井 智子	小3教室
小学6年	理 科	「てこのはたらき」	山中 豊	理科室
中学1年	理 科	「光の性質」	清水 綾介	理科室
中学2年	学 活	「目標を見直そう」	関根勘太郎	中2教室

(2) 授業研究会

学年	教科	司会	記録	指導助言者	会場
小学3年	算 数	根岸 勝良 (上野小校長)	市川千利世 (細野小教諭)	高橋 智美 (西部教育事務所指導主事)	多目的 ホール
小学6年	理 科	中町 文彦 (宮沢小校長)	俣田 慶子 (細野小教諭)	市村 武文 (吾妻教育事務所指導主事)	家庭科室
中学1年	理 科	黒崎 高行 (倉渕中校長)	佐藤由美子 (松北中教諭)	眞下 理江 (利根教育事務所指導主事)	美術室
中学2年	学級 活動	野口 浩之 (中里中校長)	石黒 賢志 (松北中教諭)	中澤 伸一 (西部教育事務所指導主事)	中3教室

〈2〉提案要旨

《小学校班》

学校の特色を生かした教育活動の推進

～ 地域や中学校との連携を図って ～

片品村立片品小学校長 樋口 徹

1 学校の概要

本校は利根郡片品村の中心部の鎌田地区に位置している。片品村では昭和40年から長い間、片品小学校、片品北小学校、片品南小学校、武尊根小学校の4小学校であった。

近年、児童数が減少したこともあり、平成26年に片品北小学校との統合が行われ、平成28年には片品南小学校、武尊根小学校との統合が行われた。現在の片品小学校は統合後2年目である。

全校児童数171名、学級数7（各学年1学級＋特別支援学級）、純朴で素直な児童が多い。統合後の児童の融和を図るため、縦割りの団活動や児童主体のいじめ防止活動などを取り入れたこともあり、落ち着いた雰囲気です学校生活を送っている。校区が広く、多くの児童は徒歩での通学が難しいため、中学校と共用する形でスクールバスを11台活用して登校している。

ひとつの学校となるにあたり、学校経営面ではそれまでの片品小学校のものを基本に、学校教育目標を「高い知性、豊かな心情、たくましい意志と創造力をもった心身ともに健全な実践力のある子どもの育成を期する（かしこく、なかよく、ねばり強く）」とした。本年度も教職員が協働一致で、よりよい人間関係づくりと地域に開かれた信頼される学校づくりを進めている。

2 実践の概要

(1) 研究主題設定の理由

村の教育行政方針のひとつに、「ふるさと片品を愛する心を育てる」が掲げられ、地域の教育に対する思いは非常に高く、学校の教育に対してとても協力的である。統合に際し、各校の活動や行事等のすべてを引き継ぐことはできないので、中心となる旧片品小学校のものを基本とし、「ふるさと片品」という視点で精選していくことが求められた。また、村内に1小学校・1中学校という形となったことで、小・中連携の重要性も高まった。児童生徒の交流をはじめ、地域との連携の面、新学習指導要領の全面実施に向けた教育課程の編成や外国語活動・道徳の時間等の授業実践の面、生徒指導の面などで、より一層の連携を進めたいと考えている。

これらのことを本校独自の特色と捉え、ひとつとなった片品小学校において、学校教育目標の達成に向けて、地域や保護者との連携のあり方、中学校との連携のあり方を、さらに工夫・発展させていく必要があると考え本主題を設定した。

(2) 実践の内容

① 地域と連携した自然学習・体験学習

尾瀬国立公園に近く、大自然に恵まれた地域性を生かした自然学習は本校の特徴的な教育活動のひとつである。統合前から各小学校で独自に進めていた自然学習だが、特に尾瀬に関しては旧片品北小学校の特徴的な教育活動となっていた。片品北小では、「みんなの尾瀬」という名称のビオトープを敷地内に作って日常的に観察したり、尾瀬の貴重な植物を読み込んだ「尾瀬花かるた」を作り尾瀬学習の一環として活用したりしていた。

これらを踏まえ、地域を知り自然に触れる学習として、本年度1・2年は遠足で北部方面（旧北小学区）を歩きながら自然観察を行い、3・4年生は武尊山方面（旧南小学区）で森

林学習を行った。このように1～4年生の遠足では、隔年で方面を変え、村内全域に行けるようにした。また、5年生は1泊2日で尾瀬ヶ原・尾瀬沼を歩き、尾瀬の自然の素晴らしさに触れ、6年生は、自然学習のまとめとしてアヤマ平を歩き、自然を保護することの大切さを学習した。事前学習も含めてこれらの活動は、地元の山岳ガイドのみなさんに協力していただき、安全確保の面ではたくさんの保護者の方に協力を得ることができた。

この2年間の反省点等をもとに、新しい片品小としての今後の自然学習・体験学習のあり方や体系化を検討していきたいと考えている。

② 伝統を生かした交流活動（千葉県銚子市立明神小学校との交歓分宿交流）

本年度で52年目を迎えた伝統的な行事であり、村内出身のほとんどの方が経験している。夏は片品の6年生が銚子へ行き、明神小の6年生のお宅へ2泊し、磯での学習や海水浴などを体験し、冬には明神小の6年生が片品へ来て、6年生の自宅に泊まり、スキーなどを体験する。環境の異なる地域の子どもたちと出会い、様々な交流体験を通して、お互いに理解と友情を深め合うことができ、人間性や社会性を向上させることを目的とした重要な行事である。本年度も、事前学習で手紙を書いて自己紹介したり、初めて友達やご家族と会う時のあいさつのしかたや配慮事項等を模擬的に体験したりしてから実施した。3日間の交流活動を無事終え、冬の交歓会がとても楽しみになっている。

片品の小学生の大切な行事であり、学校と地域・保護者をつなぐ行事のひとつでもあるので、今後も交流活動に必要な、また育てたい資質・能力を明らかにして、系統的な指導のもとで継続したい活動である。

③ 中学校との連携

教職員の連携では、統合前に片品村小中学校教育研究会としていた組織を、「片品村小・中学校連携委員会」として再編成し、より密接な小中連携を目指すこととした。連携の中心を連携推進部会（教頭会）とし、教育課程等の各種部会を設けた。4月の連携推進部会に始まり、5月には全教職員による情報交換と交流行事を行っている。特に連携推進部会では、スクールバスの運行、災害時等の連絡体制、児童生徒の交流等、様々な課題解決に向け連絡を取り合い、教育委員会や保護者等との調整等を行っている。

児童生徒の交流では、小学校から中学校へのスムーズな橋渡しができるよう、様々な活動を実施している。中体連壮行会見学・部活動見学（6年）、中学校運動会への参加（5・6年）、職場体験受け入れ、特別支援学級交流会、また、スクールバスを小中学生が一緒に利用し登下校することも日常的な交流につながっている。

中学校との連携については、児童生徒の発達の連続性を踏まえ、教科部や学年部等を一層機能させて、教育課程の連携を図っていく必要がある。

3 まとめと今後の課題

本校に赴任し、地域の方々や保護者と触れ合う中で感じられるのは、「片品にとって宝である子どもたちのために、学校への協力は惜しまない」という思いである。その思いを大切に、協力を得たりふれあいの場をもったりしながら教育活動を進めることは、教育効果を高めるだけでなく、児童が地域に愛着を持ち、地域のために役立つとする意識を高めることにつながっている。これは中学校でも同様と考え、地域連携と小中連携は切り離せないものであると改めて感じた。

今後、統合からこれまでの地域や中学校との連携の取組を、学校評価等をもとに振り返り、「新しい片品小」としての計画的・効率的な連携のあり方を検討していくことが大切であると考えている。

《中学校班》

ふるさとで心豊かに学び、生き生きと活動する生徒の育成

～ 地域及び園・小・中の連携を通して ～

中之条町立六合中学校長 中沢 博

1 学校の概要

本校の学区域は、吾妻郡の北西部に位置し、大半は山林で、白根山麓の白砂川沿いの谷あいには集落が点在している。高山植物の宝庫である野反湖、湿原が点在する芳ヶ平、天然記念物のチャツボミゴケの群生地など、豊かな自然があり、これらの自然とともに育んできた伝統文化が今も多く残されている。学区内には、六合こども園、六合小学校があり、行事やPTA活動を中心に連携が活発に行われ、地域との結び付きも強い。

本校は、生徒数27名、教職員数12名、3学級の小規模校である。生徒は、素直で、教員の指示に従い、学習や行事の準備、片付けなどに大変しっかり取り組むことができる。その反面、向上心や競争心があまり見られず、発言等もやや消極的な面がある。

2 実践の概要

(1) 研究主題設定の理由

次期学習指導要領解説総則編には、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが改訂の要点の一つとして説明されている。「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有すること」そのために、「学校は、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくことが重要である」としている。また、「学校間の接続」については、「教育が円滑に接続され、義務教育段階の終わりまでに育成することを目指す資質・能力を、生徒が確実に身に付けることができるよう工夫することが重要」と説明している。

本校では、これまでに地域との連携及び園・小・中の連携活動を多く実践してきた。これらの実践により、地域のよさを知り、それを守ろうとする心を育んだり、多くの人とのふれあいを通して思いやりの心や人と交わることの大切さを学んできた。さらに地域活動を通して、地域貢献できた自分自身を振り返り、自己肯定感を高めるようにしてきた。

このようなことから、今後も六合地区というふるさとのよさを生かしながら、これまでの連携を継続・発展させ、地域及び地域内の園・学校で、育成する資質・能力などの理念を共有し、継続した指導を積み重ねて行くことが大切だと考え、本主題を設定した。

(2) 実践の内容

① 地域との連携について

ア シラネアオイ植栽活動

野反湖周辺にかつて自生していたシラネアオイの群落の復元活動の手伝いを始めて、今年度で22年目になる。9月中旬に、この植栽活動を中心になって行っている山口さん宅の裏山に行き、苗掘りを行う。(毎年1000株ほど用意) 9月下旬、野反湖へ行き、植栽活動を行う。この行事は中学生が中心だが、町当局も全面的に協力する。一般の方の参加もあり、遠く町外から来る人もいる。野反湖の森林は『日本美しの森お勧め国有林』(全国93カ所)に選定されているが、今年度、屋久島や白神山地などと共に14カ所の最重要整備箇所選ばれた。その選定理由が20年以上も続けられているシラネアオイの植栽活動であるという話を聞き、六合中の先輩達から受け継いでいるこの環境保全活動の重みを改めて感じた。

イ ふるさと研究

この活動の前身は、昭和53年、今から約40年ほど前に始められた「入山研究」と呼ばれる郷土学習である。現在は総合学習として地域の伝統・文化・自然等を扱っている。全学年縦割りでも6グループに分かれ、テーマを決め、夏休みの現地調査等を中心に地域密着の学習活動を行っている。地域の方も大変協力的で、毎年行われる合同文化祭での発表を大変楽しみにしている。昨年度の発表テーマは次の通りである。

- ◇歴史・文化 1班「太子駅の歴史を知ろう」 ・ 2班「復活！！乙女の舞」
- ◇自然・環境 1班「チャツボミゴケ増殖大作戦2」 ・ 2班「野反湖にいる生き物」
- ◇産業・観光 1班「六合の『めんぱ』を有名にしよう」 ・ 2班「六合盛り上げProject」

ウ その他

地域からボランティア講師を招き、楽しくふれあいながら、芸術（製作活動）に親しむ「ふれあい体験」、夏休みに生徒がいくつかのグループに分かれて行う「生徒会ボランティア」、3年生がヘリコプターに搭乗して空からふるさとを見る「ふるさと体験事業」などの地域と親しむ学習活動や地域を学ぶ学習活動を行っている。

② 園・小・中の連携について

ア 合同で行う各種行事

- ・「運動会」は、5年前から合同開催されるようになった。事前に管理職と体育主任をメンバーとする運営委員会を開き、プログラム・練習計画・準備・係分担などについて検討する。種目の中には、園児児童生徒と一緒に演技する種目もあり、交流も深まった。保護者・地域の方々も多く参加し、子どもたちの活躍が認められる良い機会になっている。
- ・「六合総合文化祭」は、地域と園・小・中学校の合同で開催され、今年で4年目になる。ステージ発表、展示発表、体験活動で構成されている。地域の方もたくさん来場され、子ども達の学習の成果を見てもらう良い機会になっている。

イ 子どもたちの学び・発達を支援する組織

- ・「六合地区学校保健委員会」では、家庭・園・小・中学校が連携・協力して子どもたちの健康を守ることをテーマに、生活チェックリストの実施、広報活動、研究協議会の開催を行っている。今年度の重点的な取組は、アウトメディアである。
- ・「六合地区園小中PTA連絡協議会（六P連）」では、園・小・中学校PTA間の連絡調整を図り、教育向上のためのPTAの在り方について検討することを目的としている。夏・冬の情報交換会、PTA講演会の開催、交流会などの事業を行っている。

3 まとめと今後の課題

これまで園・小・中学校合同で多くの取組を行ってきたが、これらの取組の意味を共有したり、教育課程の接続や基礎学力の向上へと高めていくために、今年度「六合地区園小中連携一貫協議会」を設立することになった。会則（目的、事業内容、組織等）や、15年間の子どもの発達と学びを見通すために連携・一貫教育推進構想案を、園・小・中学校の全職員で共有したり、部会ごとの取組を確認したいと考えている。

来年度以降、六合中学校の生徒数減少し、平成34年度には、10人となることが予想される。これまで行ってきた行事について見直しを行っていく必要がある。一方、地域では、高齢化が確実に進み、地域の伝統・文化の伝承、環境保全など困難になってくる時が近づいている。これらの問題は、学校が解決できる問題ではないが、地域での学びを行ってきた中学生が、ふるさとのよさを知り、一人でも多く、この地域で生活することを選び、ふるさとの未来を考えてくれることを切に願うばかりである。

〈3〉公開授業・授業研究会

《安中市立細野小学校》

1 研究主題

算数科における基礎・基本を身に付け、活用できる児童の育成
～考えを伝え合い、学び合う活動を通して～

2 授業公開及び成果と課題

① 小学校 第3学年（算数） 指導者 茂木 信知

授業改善の視点

小数の加法の計算のしかたを考える場面において、異なる考え方をもちあわせた者同士のグループを作り、互いの共通点に視点を当てて考えを交流させれば、0.1を基にした小数の加法の計算方法についての考えが深まるであろう。

〈单元名〉 新しい数の表し方を調べよう（小数）

〈本時のねらい〉

1/10の位までの小数の加法の計算の仕方を考えることができる。

〈展開〉

	学習活動 予想される児童の反応	時間	支援及び指導上の留意点・評価 ◇評価項目〈観点〉（方法） ○：T1 ☆：T2
課題 把握	1 本時の課題をつかむ。	7	☆問題を児童に考えさせることで、主体的な学習意欲につなげる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> [問題] ジュースが0.5L入っているペットボトルと、0.3L入っているペットボトルがあります。合わせて何Lありますか。 </div> ○立式する。 ○立式の根拠を説明させる。 ○めあてを確認する。 [めあて] $0.5+0.3$ （小数）の計算のしかたを考えよう。		
自力 解決	2 解決の見通しをもつ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <予想される児童の反応> ・図に表して考える。 ・数直線に表して考える。 ・0.1をもとにして考える。 </div>		○どのような方法を使って計算のしかたを考えるか考えさせ、児童の発表をもとに、作戦カード（「小数のしくみ」「数直線」「図」）を黒板に貼る。 ○3種類の作戦カードから1種類を選んで、取り組むことを確認する。
	3 自分の考えを書く。 <予想される児童の考え方> ①0.5は、0.1が5こ分、0.3は、0.1の3こ分。合わせると0.1が8こ分だから、0.8L。 答え0.8L ②（数直線を使って）1めもりが0.1なので、そのめもりが8つ分なので、0.8L。	10	○☆図や数直線で考える児童には、1目盛が0.1と分かるように数値を書かせ、0.1のいくつ分と考える手立てにつながるよう支援する。 ○☆1つの考えが見つかったら、他の方法でも考えてみるように促す。（作戦カードが1枚書けたら、次の1枚を取りに行かせる。） ○違う考えの者同士がグループになれるように、児童の考えを把握しておく。

	③ (図を描いて) 1メモリが0.1なので、0.1Lの8つ分で、0.8L。	
伝え合い・学び合い	<p>4 0.5+0.3のたし算のしかたを、互いに伝え合うことを通して考えを深める。</p> <p>○4人のグループを作り、自分の考えを伝え合い、それぞれの共通点について話し合う。</p>	15
	<p>[話し合うこと] それぞれの考え方の中で、共通点は何でしょう？</p>	
		<p>○☆「小数点をそろえて」など、筆算の計算方法についての説明にならないよう、話し合いを進める。</p> <p>○☆ミニホワイトボードに貼った4人分の作戦カードを見せながら、大事な言葉や数字を考えさせ、それをもとに話し合わせる。</p>
	<p>○4人の考え方の共通点について全体で発表する。</p>	<p>◇評価項目<数学的な考え方> <おおむね満足> 小数の加法計算のしかたを、0.1の何個分かにとらえ説明することができる。(発言 観察 ワークシート) <十分満足> 小数の加法計算のしかたを、0.1の何個分かにとらえて、わかりやすくまとめたり、説明したりできる。(発言 観察 ワークシート)</p>
		<p>○各グループから児童を1名指名し、発表させる。</p> <p>○☆発表する児童に体を向けて聞くよう促す。</p>
まとめ・ふり返り	<p>○共通点を全体で確認する。</p> <p>○拡大図を見ながら、全体で問題を解く。</p> <p>5 適用問題をする。</p> <p>6 学習のふり返りをする</p>	13
	<p>[まとめ] 0.5+0.3 (小数) の計算は、0.1が何こ分かを考えて計算する。</p>	
		<p>○児童の発表する言葉でまとめをする。</p> <p>○0.1をもとにした考え方がかかれた問題を、拡大図を使い、理解を定着させる。</p> <p>○☆机間指導を行いながら、丸付けを行う。</p>

〈成果〉

○児童が図や数直線等の書き方に慣れていて、自力解決やグループ内の説明時に、道具としてよく活用できていた。

○児童に見通しを持たせるための作戦カードを譜面台に置いて説明させることで、グループ内で視覚化され、分かりやすかった。また話し合いの場面でも、カードが有効に活用されていた。

〈課題〉

○「2つの数を合わせる」ことを図や数直線に的確に表せず、自力解決が困難になってしまった児童がいた。実態を踏まえた上で、自力解決の前に必要な支援をしておく必要があった。

○教師が誘導するような話し合いになってしまったグループもあったので、児童の話し合いを支援できる作戦カードのさらなる工夫について検討するとよい。

② 小学校 第6学年（理科） 指導者 山中 豊

授業改善の視点

実験結果に基づき、てこが水平につり合うときのきまりについて考える学習において、ワークシートを利用しながら自分の考えを整理し、より分かりやすい説明の仕方について話し合う活動を取り入れれば、てこが水平につり合うときのきまりについての考えが深まるであろう。

〈单元名〉 てこのはたらき

〈本時のねらい〉

実験結果を基に、てこが水平につり合うときのきまりについて考えることができる。

〈展開〉

	学 習 活 動 予想される児童の反応	時 間	支援及び指導上の留意点・評価 ◇評価項目<観点> (方法)
課題把握	1 実験結果の確認をする。 2 学習の課題をとらえる。	5	○実験の結果一覧表、実験の画像を提示しながら、前時の実験をふり返り、確認させる。
	[めあて] てこが水平につり合うとき、どのようなきまりがあるのか考えよう。		
自力解決	3 実験の結果から、てこが水平につり合うときのきまりについて考える。 <予想される児童の反応> ・おもりの位置が遠いほど、つり合うおもりは軽くなる。 ・位置が半分になると、おもりは2倍になる。 ・てこが水平につり合うとき、おもりの重さとおもりの位置をかけた数が同じになっている。	7	○考えたことをワークシートに記入させる。 ○「つり合う」「おもりの位置」「おもりの重さ」というキーワードを示し、意識して考えさせる。 ○右の腕のおもりの位置と重さの関係について、比較しながら考えさせる。 ○必要に応じて「距離が2倍になると、おもりの重さはどうかなあ？」など、考えるヒントをあたえる。
伝え合い	4 グループで考えを伝え合い、発表する。 <予想される児童の反応> ・おもりの重さとおもりの位置をかけた数が同じとき、てこが水平につり合う。 ・てこを傾けるはたらきの大きさは、おもりの重さ×おもりの位置できまる。	18	○グループで意見を出し合わせる。 ○グループとしての考えを整理する。 ○よりわかりやすい説明・説明方法を考えさせる。(実際に実験用てこを使いながら説明する方法や、実物投影機にワークシートを映しながら説明する方法などを例示する。) ○グループの代表が発表し合い、気付いたことや他のグループの発表の良いところ等をワークシートに記入させる。





<科学的な思考・表現>

[おおむね満足]

◇てこが水平につり合うときのきまりを定量的に考え、表現することができる。

[十分満足]

◇てこが水平につり合うときのきまりを、実験結果を基におもりの重さとおもりの位置の積で考え、明確に説明することができる。

(発言 ワークシート)

5 てこが水平につり合うときのきまりについて、まとめをする。

○各グループの発表を生かしながら、てこが水平につり合うときのきまりについてまとめる。

まとめ・ふり返り

[まとめ] てこが水平につり合うとき、

〈左のうでのてこをかたむけるはたらき〉

おもりの重さ×おもりの位置

力の大きさ 支点からのきより

=

〈右のうでのてこをかたむけるはたらき〉

おもりの重さ×おもりの位置

力の大きさ 支点からのきより

6 追実験を行い、確かめる。



15 ○左のおもりの位置や重さを変えた場合の例題を出し、おもりの位置と重さを考えさせて、ワークシートに記入させた上で、てこを使って実際に確かめさせる。

7 学習のふり返りをする。

○本時の学習について、ワークシートの「がんばりチェック」に記入し、次時への学習意欲を高めるようにする。

<成果>

- 書画カメラを使って実験のふり返りができたのは、前時との連続性があってよかった。
- 板書や掲示物、ワークシートが工夫され、子供達が一生懸命に考えていた。
- 友達のよさをふまえた話し合いができていて、グループでの話し合いを通して、自分の考えが明確になっていった。
- 追実験をしたことで実感がもて、定着につながり、学習効果が高まった。

<課題>

- 実験をさせながら、自力解決をすることもできたのではないか。
- 視点（比較・分類・共通点）を明確にしてグループでの話し合いを行わせれば、より深まりのある話し合いができたであろう。
- グループごとの考えを発表する場面で、よりICTの活用を促し、ワークシートを写しながら発表させると、より考えが伝わりやすかったと考えられる。

《安中市立松井田北中学校》

1 研究主題

確かな学力を身に付けた生徒の育成
～主体的な学びを支援するための手立ての工夫～

2 授業公開及び成果と課題

① 中学校 第1学年 (理科) 指導者 清水 綾介

授業改善の視点

課題追究の場面において学習形態やワークシートを工夫することで、生徒は意欲的に課題追究に取り組むであろう。

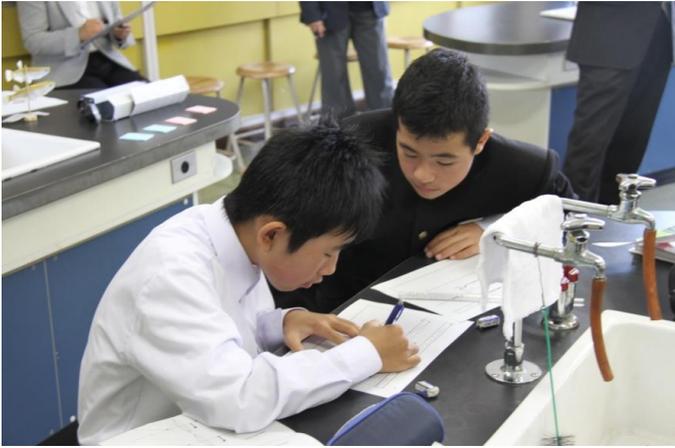
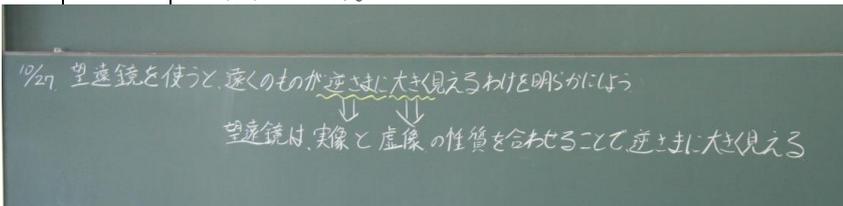
〈題材名〉「身近な物理現象（光と音）」

〈本時のねらい〉

凸レンズ2枚を組み合わせると遠くのもの逆さまに大きく見える理由を、作図によって明らかにする。

〈展開〉

学習活動 ・予想する生徒の反応及び意識	時間 (分)	支援及び指導上の留意点・評価 (◇は評価、◎は「努力を要する」状況の生徒への支援)
1 前時の内容を振り返り、 本時のめあてを確認する。 ・望遠鏡は遠くのもの逆さまに大きく見えたな	10分	○接眼レンズ越しに撮影した画像と肉眼で見た場合の画像を用意し、違いに気づきやすくする。
めあて 望遠鏡を使うと、遠くのもの逆さまに大きく見える理由を明らかにしよう。		
2 凸レンズが2枚あるときの光の進み方を作図する。 ・レンズ2枚だけでどうして像が見えるのだろう ・作図すると元の物体より大きな像が現れるな	25分	○凸レンズが1枚の時の作図をもとに、対物側と接眼側で一つずつ作図していけばよいことを伝える。 ○個人での追究ののちに、早く作図ができた生徒には、まだできていない生徒に助言をさせる。(ペア学習) ◎教科書の作図例と照らし合わせながら、どの点を結ぶかを示して作図させる。(ヒントカードの活用)
<p>〈ねらいを達成した生徒の意識〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2枚のレンズを組み合わせるだけでも遠くのものが見えるようになるんだな ・遠くの物体を実像にしてから虚像で拡大しているんだな 		
		<p>◇評価項目</p> <p>凸レンズ2枚を通してできた像の作図を通して、望遠鏡の仕組みを理解している。(ワークシート)</p> <p>【科学的な思考・判断・表現】</p>

<p>3 作図を確認しながら、実際に望遠鏡で景色を観察して実感を深める。</p>	<p>5分</p>	<p>○望遠鏡で太陽を見ることがないように指導する。 ○実際に窓からの景色を観察させ、上下逆さまに見えることを確かめさせる。</p> 
<p>4 まとめを行う。</p>	<p>10分</p>	<p>○望遠鏡やカメラの仕組みなど、身近なところに学習内容が関わっていたことを確認し、今後の学習につなげていく。</p>  <p>まとめ 望遠鏡は実像を虚像として拡大するので、像が逆さまに大きく見える。</p>

〈成果〉

- ペアグループによる生徒同士の教え合い・学び合い活動が活発に行えたことで、学習をより深めることができた。
- 自分で作った望遠鏡の仕組みを考えることは、学習内容と日常生活との関連付けや次の学びの意欲につなげることに有効であった。



〈課題〉

- 難易度が高い課題であったため、作図がスムーズにできない生徒が多かった。段階的にヒントになるような声かけを行ったり、ヒントカードを積極的に使ったりする支援が必要であった。
- まとめの時間が少なくなってしまったため、生徒の言葉の吸い上げが不十分であった。可能な限り、生徒に発表させる場を用意したい。



② 中学校 第2学年 (学級活動) 指導者 関根 勲太郎

授業改善の視点

議題の追究場面において、家庭・地域・学校の思いを紹介したり、意見を構造化する活動を取り入れたりすれば、生徒の意識が深まり、あこがれの3年生に成長するための道しるべを考えることができるであろう。

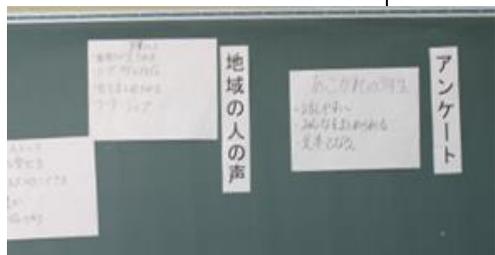
〈題材名〉「変身! あこがれの3年生へ ~道しるべを考えよう~」

〈本時のねらい〉

生徒による自治的な話し合い活動において、あこがれの3年生に成長するための道しるべを考えることができる。

〈展開〉

学習活動 ・予想する生徒の反応及び意識	時間 (分)	支援及び指導上の留意点・評価 (◇は評価、◎は「努力を要する」状況の生徒への支援)
<p>1 議題(テーマ)を把握する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日のテーマは「あこがれの3年生を目指すための道しるべをつくろう」という内容だったな。 思ったよりも、学級目標の達成度は高いね。 あこがれの3年生に「なれる」と「なれない」は同じくらいの人数だよ。 クラス全体があこがれの3年生になるには、まだ足りないところもありそうだ。 あこがれの3年生になりたいという気持ちは、みんながもっているよ。 フィッシュボーンは社会の授業でもやってみた方法だな。 みんなの意見を整理しながら、道しるべにしていきたいね。 	5分	<p>○計画委員がスムーズに進行できるよう、適宜助言する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>議題(テーマ) あこがれの3年生に成長するための道しるべを考えよう。</p> </div> <p>○提案理由の説明では、計画委員が行った検討の経緯や、事前に行ったアンケートの結果を踏まえた説明ができるよう助言する。</p> <p>○教師の話では、アンケート結果や提案理由に関する補足をしながら、よりよい学級を目指そうとする意識が深められるような話し合いになるよう助言する。</p> <p>○計画委員の事前準備の様子や成果を教室壁面にまとめ、本時への意欲を高められるようにする。</p> <p>○4月に学級目標を決めたときのことを想起できるように、教室内の掲示物を工夫する。</p> <p>○到達度が分かるよう、アンケート結果を事前に用意し、視覚的に捉えさせる。</p> <p>○アンケート結果から、「あこがれの3年生になるにはまだ足りない」という考えを引き出せるよう、司会が発問を工夫したり、問い返しを行ったりできるようにする。</p> <p>○生徒から意見を引き出すのが難しい場合には、計画委員から改善について提案できるようにし、話し合いの時間の確保に努める。</p>
<p>2 議題を追究する。</p> <p>(1) 家庭・地域・学校の思いの提示</p> <ul style="list-style-type: none"> 中学生のことを地域の人はどう思っているのだろう。 小学校の先生たちも私たちの成長を願っているのだな。 	5分	<p>○2年生としてどのように成長をしてほしいか、地域の人や保護者の思いを紹介し、どのような面で自分たちの努力が必要なのか考えられるようにする。</p> <p>○特性要因図の作成を行う際に役立つよう、キーワードを黒板にまとめさせる。</p> <p>○特性要因図中にも地域の人の願いを書き込み、それを意識しながら意見を考えられるようにする。</p>



<p>(2) 特性要因図の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の自分たちの様子と、地域の人の思いを踏まえて、目標に表せないかな。 ・学習面については、計画的に課題を終わらせることが難しいな。 ・生活面では特に意識して行動しないと、3年生に相應しくないと思うよ。 ・今年の3年生や去年の3年生のあこがれるところってどこだろう。 ・個人的に思ったことだけど、他にも同じように考えている子がいるね。 ・違う面でも、似たような意見があるよ。まとめられないかな。 ・今できていることもあるよね、それを伸ばすのはどうだろう。 ・フィッシュボーンが完成したら、クラスに掲示していつでも振り返れるようにしたいね。 	35分	<ul style="list-style-type: none"> ○全員で思考できる場をつくるために、特性要因図を拡大して用意する。 ○必要に応じて意見を付け足したり、修正したりできるよう、付箋紙を用意する。 ○「学習面」「生活面」「運動面」「その他」の4項目を立てることで、学級目標に立ち返りながら意見を整理できるようにする。 ○予め考えておいた意見を発表するだけで満足してしまわないよう、計画委員が意見の問い返しをしたり、他の生徒に意見を比較させたりしながら、考えを深められるようにする。 ○話合いが活性化し、意見が飛び交うようになったら、計画委員は友達の意見を付箋紙にまとめる仕事を行い、話合いの流れが切れないようにする。 ○司会進行表のほか、司会対応マニュアルを事前に確認しておくことで、当日の進行をスムーズにしたり、意欲的に意見が交わされる場にしたりできるようにする。 ○集団決定を行う際には、各意見を十分に検討し、折り合いをつけながらまとめられるようにすることで、学級での共通理解が図れるようにする。 ○進行に迷いが生じた場合や、話合いの方向が明らかにならずにいる場合には、適宜助言を行い、円滑な話合いの場が保たれるようにする。 ◎友達の意見に対して考えが示せない生徒については、自分がどう思ったか問いかけ、できた意思表示を称賛し、活動への意欲を高める。
<p><ねらいを達成した生徒の意識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・あこがれの3年生を目指すために、できている面もあれば、まだまだ成長が必要な面もあるな。それを補うためにはどんな方法があるかな。 		<p>◇評価項目</p> <p>地域の人や保護者の願いを受け止めながら自分たちの生活を見直し、あこがれの3年生を目指すための道しるべを具体的に考え、理由を示して意見を述べている。(ワークシート、観察)</p> <p>【集団や社会の一員としての思考・判断・実践】</p>
<p>3 学級会のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日考えたことを意識しながら、これからの生活を送って、あこがれの3年生を目指したいね。 	5分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の話合い活動を通して気づいたことや考えたことなどを、学級活動ノートに記入するよう助言する。 ○話合いの流れを方向付けた発言や計画委員の活動などを称賛するとともに、実践に向けての意欲を高める。



<成果>

- 家庭や地域、学校の思いを計画委員が事前にインタビューしたことが、話合いへのモチベーションを高めるために効果的だった。
- 普段見直されにくい学級目標にメスを入れたことは、PDCAの観点からも有効だった。

<課題>

- フィッシュボーンチャートは効果的であった半面、意見を構造化する(収束する)ために全体で意見を共有する時間を設けるなど、教員や計画委員が工夫する必要がある。
- 学級の道しるべを考えるのか、個人の道しるべを考えるのか、「ねらい」や「ねらいを達成した生徒の意識」から、授業のゴールが見えるようにする必要があった。

Ⅲ 第66回全国へき地教育研究大会（高知大会）

〈1〉概要報告

高崎市立倉渕小学校長 小池 政一

「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成 ～へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かした学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～」を研究主題として、第66回全国へき地教育研究大会が、平成29年11月1日から2日間にわたり高知市を中心に開催された。1日目は高知県立県民文化ホールを会場に、全国からのへき地教育研究連盟会員の参加により全体会・記念講演が行われた。本県からは、県教育委員会指導主事並びにへき地学校長の合計7名が参加した。午後は、高知市内6会場に分かれ、課題別分散会が行われた。2日目は、高知県内8つのへき地小中学校で公開授業が行われ、各分科会場で研究の成果が発表された。

第1日（11月1日）「全体会・分散会」

全体会では開会式に続き全国へき地教育研究連盟研究部長より第8次長期5か年研究推進計画4年次の推進についての基調報告が行われた。昨年度の青森大会における成果と課題を踏まえ、5か年計画の4年目としての高知大会の意義について説明があった。また、高知大会実行委員会研究部長より高知県における教育振興計画から、大会スローガン「中山間地域の振興で、へき地教育の新しい未来を！！～へき地の3特性を効果的に生かし、生きてはたらくへき地複式教育を発信していく～」に至る考え方の説明があった。研究のポイントとして、「学習リーダー」を活用した児童生徒主体の課題解決学習の在り方を提起するとのことであった。

その後、高知県出身のフリーアナウンサー福留功男氏による『私の生き方に関わった故郷の山、川、海』と題した記念講演が行われた。小学校時代にふるさとの野山で子ども同士の遊びの中から得た経験が、その後の人生に大きな影響を与えていった事を、具体的なエピソードを基に、ユーモアを交えながら講演して下さった。自然からの学び、地域の大人や上級生からの学びが、その後の生き方や考え方の基盤になっているとし、教育の大切さを訴え、参加者に勇気と元気を与えて下さった。

次回開催地（京都府）挨拶並びに大会旗引継ぎを行った後、アトラクションとして、いの町立長沢小学校・本川中学校の児童生徒と、本川神楽保存会による『本川神楽』が披露された。子どもたちの真剣な舞に会場から大きな拍手が送られた。

午後は、全国第8次研究推進計画研究課題別（課題1：家庭や地域と連携して、確かな学びを創る特色ある教育計画の創造と推進、課題2：ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進、課題3：地域に根ざし、家庭や地域と連携して豊かな心をはぐくむ教育活動の創造と推進、課題4：児童生徒の分かる喜びや個性の伸長を重視した指導計画の改善・充実、課題5：学習意欲の向上や個に応じたきめ細かな指導を重視した指導方法の改善・充実、課題6：課題意識をもって自ら学び、仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実）の6会場に分かれ、全国ブロックの12代表校から実践発表が行われた。また、それを基に活発な研究協議が行われた。

第2日（11月2日）「授業公開・分科会」

2日目は、高知県下8つの小中学校（A馬路村立魚梁瀬小中学校、B南国市立奈路小学校、C高知市立義務教育学校土佐山学舎、D高知市立義務教育学校行川学園、E中土佐町立大野見小学校、F中土佐町立大野見中学校、G四万十市立中筋小学校、H四万十市立中筋中学校）で、分科会が行われた。前半は、それぞれの学校で研究主題に沿った授業が公開された。後半はそれぞれの学校で取り組んできた研究実践の発表が行われ、それを基に研究協議が行われた。

〈2〉 分科会報告

A分科会

確かな学力と豊かな表現力を身に付け、主体的・対話的に 学びを深める児童生徒の育成

～極少人数による個に徹した教育実践を通して～

群馬県教育委員会義務教育課指導主事 武川 光

1 会場校 馬路村立魚梁瀬小中学校（学級数5 児童生徒数18名 職員数13名）

2 地域・学校の概要

魚梁瀬地区は、高知県東部馬路村の中心部から北北東へ17km離れた奈半利水系の最上流に位置する集落である。明治の時代から魚梁瀬杉の産地として発展してきたこの地であるが、現在、過疎化による地区の人口と児童生徒数の激減が大きな課題となっている。

地域活性化への取組として、「山の学校留学制度」が平成9年に導入された。平成29年度は、計18名の児童生徒のうち6名が山間留学生である。また、平成20年より小中一貫教育を実施し、確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和がとれた児童生徒の育成に取り組んでいる。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

個に徹した「学びを深める」効果的な授業づくりの研究と実践

(2) 具体的な取組

- ① 研究の取組が検証できるよう、学校独自の【取組検証シート】を小中で作成し、活用している。学校の課題を踏まえ、1年後のゴールイメージを意識した具体的な取組、評価指標を設定し、中間検証（7、8月）・年度末検証（1、2月）を行い、成果・課題を分析している。
- ② 課題を基に、授業の視点を以下の2点に定め、校内研究授業等において活用した。
 - ・『めあての明確化とまとめとの整合性』は図れていたか。
 - ・『主体的・対話的な学びを深める手立て』は効果的であったか。
- ③ 各教科において、単元全体を通した児童一人一人に対する評価規準と手立てを記入した【個に徹しま表】を作成し、活用した。

(3) 公開授業

- ① 算数 小1・2：1年「ひきざん」、2年「かけ算」
- ② 算数 小3・4：3年「円と球」、4年「面積のはかり片と表し方」
- ③ 算数 小5・6：5年「図形の角を調べよう」、6年「順序よく整理して調べよう」
- ④ 外国語 中1年：「ブラジルから来たサッカーコーチ」

4 所感

算数の授業では、既習と本時の共通点や相違点を基にめあてを立てさせたり、めあての言葉を引用してまとめを書かせたりするなどして「めあての明確化とまとめとの整合性」を図っていた。また、自分の考えを説明する機会を数多く設定するなど、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に積極的に取り組んでいた。個に徹する指導と今日的な教育課題への対応を両立していることは、魚梁瀬小中学校の大きな魅力だと感じた。学校には、人を呼び込み、地域を活性化する力がある。へき地教育の可能性を実感することができ、有意義な研修となった。

B分科会

つながり合い 学び合う 授業をめざして

～言語活動の充実を通して、考えを深め広げる児童の育成～

東吾妻町立岩島小学校長 松本 聡

1 会場校 南国市立奈路小学校（学級数5 児童数30名 職員数8名）

2 地域・学校の概要

南国市は高知市の東側に隣接した県中央部の街である。奈路は南部海岸線にある高知龍馬空港から車で30分、北部にある高知自動車道南国ICから10分の距離の四国山麓の山間に位置する地域である。地域の学校への関心は高く、常に学校と地域が協同して歴史を刻んできた。

奈路小学校は明治5年創設の長い歴史をもつ学校で、平成12年度より小規模特認校制度を導入し、市内全域から児童が通学している。平成17年度には市のコミュニティー・スクールの指定、平成28年度は地域学校協働活動で文科大臣賞を受賞した。また、同年度より小規模・複式校未来づくり推進校に指定され、授業公開や取組の発表を行っている。

3 研究の概要

(1) 研究内容

① 児童に身に付けさせたい力とゴールを明確にした言語活動を実践することによって、主体的に学び合う子どもが育つであろう。

- ・児童につけたい力の明確化
- ・出口をイメージさせる単元計画
- ・課題を明示し、見通しをもたせる学習指導

② 教科リーダーを中心に話し合う力を育成し、子ども同士をつなぐことができれば、協力的合い、高め合う子どもが育つであろう。

- ・手引きを活用した教科リーダーの育成
- ・話し合い活動の充実
- ・子ども同士をつなぐ教師の授業力

(2) 公開授業

- ① 1校時 1年国語（単式）「いろいろなふね」
〃 2年国語（単式）「かさこじぞう」
〃 3・4年国語（複式）3年「盲導犬の訓練」
4年「くらしのなかの和と洋」
〃 5・6年国語（複式）5年「注文の多い料理店」
6年「海のいのち」

② 2校時 3・4年道徳（複式）【奈路小・白木谷小2校合同授業】「風に乗って」

4 所感

奈路小学校は、山間の小さな学校だが、そこで学ぶ児童は非常に生き生きとしており、学校紹介のビデオを見ても、「未来を切り拓く児童を地域と学校が連携して育てていく」ということが根付いていることが分かり、地域の教育力の高さを強く感じた。また、どの授業を見ても先生方の指導力の高さと情熱を強く感じさせられた。授業では子どもたち一人一人の主体的な学びを促すために、単元で身に付けたい力やゴールを掲示したり、1時間の学習の流れを掲示したりして、「学習の見通し」をもたせていた。また、教科リーダーの育成・活用にも力を入れていた。これらの点は我々の学校でも即実行可能なので日々の授業に取り入れていきたいと思った。

C分科会

主体的に学び、豊かに表現する子どもの育成

片品村立片品中学校長 高桑 実

1 会場校 高知市立義務教育学校 土佐丸学舎（学級数12 児童生徒数141名 職員数24名）

2 地域・学校の概要

高知県の市街地から北へ13km、鏡川のせせらぎと深い緑に囲まれた山間部に位置しており、その豊かな自然を活用して、ゆず、しょうが、四方竹などの特産品とその加工品の生産・販売や有機農業の拡大など、地域の将来を見据えた産業の育成にも取り組んでいる。

平成23年高知市は、「土佐山百年構想」を打ち出し、平成27年施設一体型の小中一貫教育校「土佐丸学舎」を誕生させた。また、土佐山地域在住の児童生徒と高知市の特認校制度を利用した校区外通学の児童生徒を合わせた募集を行い、「社会学一体型」の理念のもと、「土佐山学」や「英語教育」等に取り組んでいる。

3 研究の概要

(1) 研究内容

- ① 小規模校における主体的・対話的で深い学びが実現する授業づくりの実践研究
 - ア 各教科で身に付ける力を明確にした単元構成・授業構成
 - イ 小規模校の特性を活かした児童生徒主体の学習活動の工夫
 - ウ 基礎学力定着の取り組み エ ICT機器の効果的な活用
- ② 土佐山学（生活科・総合的な学習の時間）の実践研究
 - ア 探究のプロセスを意識した協働的な学習
 - イ 論理的に考えたり他者に分かりやすく表現したりする力の育成
 - ウ 実社会に活用できる能力の育成
- ③ 9年間を見通した外国語活動・外国語教育の授業づくり
 - ア 英語をツールとした発信の機会の設定

(2) 公開授業

- ① 公開授業Ⅰ 各教科
 - やまびこ（生活単元・自立）「にこにこふれあいフェアへ行こう」
 - 1年国語「のりものずかんをつくろう」 2年生活「土佐山の名人に会ってみよう」
 - 3年国語「働く犬を紹介するカードを作ろう」 4年外国語「できることを伝えよう」
 - 5年総合「土佐山の恵み」 6年国語「プレゼンテーションをしよう～街の幸福論」
 - 7年社会「世界の動きと武家政治の始まり」
 - 8年英語「program7 if you wish to see a change」
 - 9年国語「新聞の社説を比較して読もう」
- ② 公開授業Ⅱ 7～9年 総合的な学習の時間「中間発表」

4 所感

公開授業Ⅰでは、ICTを活用して、課題の提示や児童生徒の発表、学習のまとめ等、見える化を図った支援を行っていた。国語科では、見方・考え方を明確にし、生徒を主体とした学び合い活動を行っていた。また、英語科では、さまざまなカードを用いた発音練習やパネルを用いて紹介する表現活動などを意欲的に行っていた。特に、英語科では、常勤として勤務している英語塾の先生が入り、日本語を一切使用しなくても無理なく授業が進んでいたことが印象的であった。公開授業Ⅱでは、地域に貢献するために起業したり地域の行事を立ち上げたりする実践の紹介の様子を参観したが、地域の教育力を活かし、開かれた学校を目指した教育実践であることを強く感じた。

D分科会

自ら課題に取り組み、ともに学び合う児童生徒の育成

高山村立高山小学校 教頭 高橋 直樹

1 会場校 高知市立義務教育学校行川学園（学級数8 児童生徒数41名 職員数20名）

2 地域・学校の概要

高知市行川地区は、高知市北西部に位置する中間山地であり、市内中心部から30分、生姜の山地として有名である。行川学園は、本年度で140年目となり、地域の教育を紡いできた歴史ある学校でもある。平成28年度より、義務教育学校として新たな歩みが始まった。特認校でもあり、校区外の子どもたちを積極的に受け入れ、中学校段階に当たる後期課程では、校区外の生徒が多くなっている。自己有用感をキーワードとして教育活動を実践してきた行川学園は「地域とともにある学校」として、地域と子どもを結ぶ役割を果たし、協力的な地域や保護者の力を最大限に生かしつつ、より良い学校づくりを推進してきている。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

小規模校の一人一人に目が届き、丁寧な指導ができる等の「強み」と学習集団の固定化により切磋琢磨する機会が少ない等の「弱み」を踏まえた研究を行っている。

研究仮説

仮説① 異学年交流や地域との活動を生かせば、自分と他者の関係を肯定的に受け入れられることで生まれる「自己有用感」が高められ、児童生徒は集団活動に進んで参加し、学習集団の一員としての自信や誇りが獲得されるであろう。

仮説② 学習リーダーが活躍する場面を設定し、グループで協働的に高め合う活動を取り入れていけば、児童生徒は主体的に学習に取り組むことができるであろう。

① 複式学級における学習指導の工夫・改善

国語・算数の複式授業スタンダードを作成し、複式授業改善に取り組む。（小学校段階）

② 学習リーダーの活用による主体的・自立的な学習の研究

小学校段階で育成された学習リーダーを中学校段階で効果的に活用する学習活動の在り方について、小学校段階・中学校段階の双方の視点から授業研究を行う。

③ 児童生徒への個に応じた支援や望ましい人間関係作りの推進

(2) 公開授業

1校時 公開授業① 1・2学年：算数 3・4学年：算数 5・6年：算数
7学年（中1）：英語 8学年：数学 9学年：音楽

2校時 公開授業② 全校：特別活動

4 所感

公開授業①1・2年生の参観では、子どもたちの意見を練り上げて授業を構築しようとする教職員の意欲や意識が強く見られた。具体的には、子どもたちは授業の中で出てきた意見を1・2年生なりに比較・検討して考えを一つにまとめていく姿が見られた。公開授業②では、全校での特別活動だった。これは、年間を見通した異学年交流で、「自己有用感」を高める試みであり、へき地としての弱みを解消しようとする工夫ある取組だった。学校教育活動全体を通じた関わりを増やす工夫が確実にへき地の「弱み」を解消してくれていると感じた。本校では全校清掃や団別活動等を実施しているが、一層の異学年交流を取り入れていきたいと考える。

E分科会

生き生きと学び合い、主体的に活動する児童の育成

～とも学びの充実を目指して（算数科を中心に）～

高崎市立倉渕小学校長 小池 政一

1 会場校 中土佐町立大野見小学校（学級数5 児童生徒数37名 職員数11名）

2 地域・学校の概要

中土佐町は県中西部に位置する人口7,200人ほどの町である。大野見地域は、町の北部中山間に位置し、標高300mほどの山間に田園風景の広がるのどかな農山村である。地域を流れる四万十川は日本最後の清流と称され、日本の原風景として国の重要文化的景観に指定されている。

大野見小学校は、昭和60年に大野見村立中央小と南小が統合して開校。さらに、平成21年に北小学校が統合し現在に至っている。昭和56年にも全国へき地教育研究大会の会場校となっており、伝統的に真面目で素直な児童を育成してきた。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

研究仮説1 自分たちで学習を進めていくことができる主体的な態度の育成に向けて

- ・算数科授業スタンダードの確立
- ・1時間の学習の流れの揭示
- ・ノート指導
- ・学習リーダーの育成
- ・学習リーダーを活用した授業

研究仮説2 算数科の力を付けていくために

- ・とも学びの充実に向け、目指す児童の姿を明確にして児童を育成していくこと。
- ・本校の課題（図形領域）に対して、系統や指導の要点を把握して授業を行うこと。

(2) 公開授業

① 公開授業Ⅰ

算数「はしたの大きさの表し方を考えよう」3・4年（複式）

算数「形が同じで大きさがちがう図形を調べよう」6年（単式）

② 公開授業Ⅱ

算数「ひきざん」1年（単式）

算数「新しい計算を考えよう」2年（単式）

算数「比べ方を考えよう」5年（単式）

4 所感

3・4年生の複式学級では、同じ教室で学年ごとにそれぞれの黒板に向かい、それぞれの課題問題を解決しようと児童主体の学習が展開されていた。教師は、学年の間に立ち、それぞれの学習リーダーの進行を見守り、時々助言したり、賞賛したりして学習を支援していた。課題に対し児童は話し合って「めあて」を設定する。その後、「一人学び」で問題を解くとともに、やり方の説明をミニホワイトボードに記述した。「とも学び」では、それぞれのホワイトボードを黒板に貼り、やり方を説明。学習リーダーが司会となり、質問を受け付けたり、付け足しを求めたりしながら、話し合いを進めた。それらの活動は事前に予定時間が掲示されており、時間内に活動が終了するように、児童は集中して取り組んでいた。

2校時目の他学年の学習でも、ほぼ同じパターンで学習が展開され、児童は意欲的に取り組んでいた。指名し合ったり、発言し合ったりする態度も鍛えられており、授業スタンダードが徹底されていると感じた。自分の考えを人にわかりやすく伝える力が育っていると感心させられた。

F 分科会

「話し合い、考え、表現できる」生徒の育成

～日々の教育実践を通して～

孺恋村立孺恋中学校長 地田 功一

1 会場校 中土佐町立大野見中学校（学級数3 生徒数17名 職員数12名）

2 地域・学校の概要

中土佐町は、県中西部に位置する人口7千2百人ほどの町である。そして、大野見中学校のある大野見地域は、町の北部中山間に位置し、標高300mほどの山あいには田園風景の広がるのどかな農山村である。大野見中学校の生徒は、山村の子どもらしく真面目で素直である。地域も家庭も教育には熱心で、授業は一生懸命受けるのが当たり前、宿題はやってくるのが当たり前といった風土があり、学校を支えている。学校としても、道徳教育、国際理解教育、外国語活動、コミュニティ・スクール等々の指定事業を受け、知徳体のバランスのとれた生徒の育成に向けて、地道な取組を続けている。

3 研究の概要

(1) 研究の内容

少人数の中で育ってきた生徒に、多様な考えのある環境を提供し、自らの考え自分の言葉で表現できることを目指して、授業はもとより、全ての領域、生徒会活動、部活動に至るまで、表現を意識して取り組む。

研究仮説

生徒が話し合い、考え、表現できる場面を意図的に設定するなどの授業改善を推進することで、課題である受け身的な態度を改善し、主体的で将来に希望がもてる生徒が育成されるだろう。

① まず、授業では「話し合い、考え、表現できる」生徒はどのような姿かを教科ごとに具体的に表し、共通する部分を「目指す生徒像」として明確にし、授業スタンダードの一環として取り組む。

② 次に、「授業スタンダード」における「学習課題」の設定、「自力解決」「集団解決」「まとめ」「振り返り」の精度の向上の工夫に努める。

(2) 公開授業

① 公開授業Ⅰ 1学年：国語「少年の日の思い出」 2学年：数学「図形の性質と合同」
3学年：理科「酸・アルカリとイオン」

② 公開授業Ⅱ 全校：道徳「一冊のノート」

4 所感

参観した授業全てにおいて言えることは、生徒が深く学べる質の高い授業づくりである。授業の中には、「話し合い、考え、表現できる場面」が明確に位置づけられ、生徒が自分自身の考えを表現する機会が設定されている。具体的には、学習過程として、学習課題、自力解決、集団解決、まとめ、振り返りを設定し、その中で表現活動の場を確保・保証する授業となっている。各学年における生徒数は、3名、8名、6名と少人数ではあるが、人数を感じさせない活発で動きのある学習であった。全生徒参加での全校道徳は、異学年のそれぞれの特徴とよさが発揮された深まりのある授業である。大野見中学校の実践は、へき地教育の魅力と素晴らしさ、そして、新学習指導要領へのヒントや手がかりを強く感じるものであった。

G分科会

一人ひとりが主体的に学び、ともに高め合う児童の育成

～言語活動の充実を目指した授業づくり～

沼田市立多那小中学校長 小林 彦名

1 会場校 四万十市立中筋小学校（学級数5 児童数34名 職員数10名）

2 地域・学校の概要

四万十市は、高知県西南部に位置し、豊富な山林資源と日本最後の清流四万十川、南東部は太平洋に面しており、自然環境に恵まれている。旧中村市と旧西土佐村が平成17年4月10日に合併して誕生した。

明治8年の学制により設立され、明治20年の統合で中筋小学校となる。昭和57年2度目の改築後、2つの住宅団地が造成された。住宅が増加し、児童の減少にも歯止めがかかった。しかし、18年度からは複式学級が編成されるようになり、22年度からは、2つの複式学級編成となった。今後も数年は、単式学級と複式学級が混在する状況が続く。

3 研究の概要

(1) 研究仮説

- ① 言語活動を充実させ、対話的な学びのある授業づくりをすることによって、自らの考えを広げ深めることができ、学習内容が理解され、学力が向上するであろう。
- ② 基本的な生活習慣の確立や全校活動の取組、将来を見据えた自学自習の習慣化（予習）が、学習を支える生活や心につながって行くであろう。
- ③ 小中で連携して、発達段階や教科において系統性、一貫性のある指導と検証をすることによって学習面や生活面での9年間を通した取組がさらに向上されるであろう。

(2) 研究内容

- ① 主体的・対話的な授業づくり
 - ・学習リーダーを活用してとも学びで、対話や気づきを大切にしたい授業をする。
 - ・自分や友だちの考えが見えるノートを作成する。
 - ・時間配分や時刻を意識して1時間完結型の授業を推進する。
- ② 小中連携の実際
 - ・2部会（学力向上部、生活支援部）を中心として共通の取組を実施する。
 - ・授業に生かされる授業スタイル（スタンダード）を活用する。

(3) 公開授業

- ① 公開授業Ⅰ 1年：算数（単式） 2年：国語（単式）
- ② 公開授業Ⅱ 3年：国語（単式） 4年：算数（単式） 5・6年：国語（複式）

4 所感

中筋小学校は、本校と同様に単学級と複式学級が混在した学校規模であり、研修主題も重複するところがあり、たいへん参考になった。へき地小規模校に共通する課題の一つは、自分の考えをしっかりと説明したり、発表したりすることがなかなかできないことである。協働的な学び合いを通して、児童の主体的活動、特に活発に意見を交流していくことは、表現力向上への有効な手立てである。特に、前述した「学習リーダーの育成・活用」については、児童の主体的学習習慣の確立や自己存在感、自己有用感の醸成にも大変効果的な手立てである。

保護者や地域との連携がしっかり行われていること、人々の温かさや思いを強く感じる点など、本校においても様々な連携強化、地域に根ざした教育を引き続き推進していきたいと考える。

H分科会

課題意識を持ち、主体的・対話的に学び合う生徒の育成

～言語活動の充実を目指した授業づくり～

南牧村立南牧中学校長 飯塚 真琴

1 会場校 四万十市中筋中学校（学級数3 生徒数16名 職員数11名）

2 地域・学校の概要

四万十市は高知県南西部に位置し、中筋中学校校区は四万十市の西端にあたり、宿毛市に隣接している。昭和22年に幡多郡中筋中学校として新設された。旧中村市と宿毛市の間にあり、昔は交通の要所であった。地域の過疎・高齢化に伴い、生徒数は、昭和37年度の145名をピークに減少し続け、現在は16名である。生徒会が中心となって、様々な行事を企画し、小規模校ならではの特性を生かした活動を行っている。保護者や地域住民は、学校教育活動に協力的で、小中合同運動会や登下校の見守り、地域清掃・廃品回収など、支援体制も確立されている。小中連携については、各校共に学力向上部会と生活支援部会を共通に組織し、9年間の一貫性を追究した教育活動を行っている。

3 研究の概要

(1) 研究内容

① 研究仮説

仮説Ⅰ：課題解決に取り組む生徒の育成のために（導入の工夫と学習の過程の吟味）

仮説Ⅱ：互いに伝え合い、考えを深める子どもの育成のために（言語活動の充実）

仮説Ⅲ：学習内容の定着のために（まとめと振り返りの工夫・充実）

② 授業スタンダードに基づく授業改善 4つの視点

○生徒の興味・関心を引く、めあてを工夫し、授業の流れを視覚化

○個で解決させる場面を設定し、個に応じた支援

○生徒が主体となって考えを出し合う場面を設定

○学び合ったことをまとめ、授業の振り返りの実施

③ 二部会の取組

学力向上部会（言語活動、ユニバーサルグランドデザイン、授業会の時間活用）

生活支援部会（家庭学習、基本的な生活習慣、仲間作り）

④ 連携と小規模の特性を生かした取組

小中連携、研究協力校連携、小規模校の特性を生かした取組

(2) 公開授業

① 公開授業Ⅰ 1年：理科（8人） 2年：英語（4人） 3年：社会（4人）

② 公開授業Ⅱ 1～3年：道徳（16人）

4 所感

四万十市立中筋中学校では、生徒たちの学びの充実のために様々な取り組みがみられた。課題意識を持ち、主体的・対話的に学び合う活動を取入れ、S T (Student Teacher) の役割を明確にした学習場面の工夫があった。各教科において主体的・対話的な深い学びに到達するために、学習計画を作成し全校一致の体制で授業改善に取り組んでいた。隣接する中筋小学校と研究推進のために共通の二部会（学力向上部会、生活支援部会）を設置し、9年間をスパンとした連携がはかれるよう充実したものとなっていた。

生徒と教師の信頼関係が良好な学校を視察し、自校の授業改善のヒントを頂くことができた。

資 料

I 平成29年度 へき地学校資料

〈1〉 級別へき地学校数

平成29. 5. 1 現在

校種別 \ 級別	級別							A 計 分校	B 県全体 分校	A —— B
	県準	特地	国準	1級	2級	3級	4級			
小学校	5	3	3	6	1	0	0	180	3082	5.8%
中学校	4	2	2	4	2	0	0	140	1611	8.7%
計	9	5	5	10	3	0	0	320	4663	6.9%

〈2〉 級別へき地本校分校別学校数

〈() 内は、内数で休校中の学校である。〉

平成29. 5. 1 現在

校種別 \ 級別	級別								小計	合計
	県準	特地	国準	1級	2級	3級	4級			
小学校	本校	5	3	3	6	1	0	0	18	18
	分校	0	0	0	0	0	0	0	0	(0)
中学校	本校	4	2	2	4	2	0	0	14	14
	分校	0	0	0	0	0	0	0	0	(0)

〈3〉 級別へき地学校児童数

平成29. 5. 1 現在

校種別 \ 級別	級別							計 (A)	県全体 (B)	A —— B
	県準	特地	国準	1級	2級	3級	4級			
小学校	592	612	199	266	43	0	0	1,712	100,903	1.7%
中学校	284	167	337	128	57	0	0	973	53,102	1.8%
計	876	779	536	394	100	0	0	2,685	154,005	1.7%

〈4〉郡市別へき地学校数一覧

〈() 内は、内数で休校中の学校である。〉

平成29. 5. 1 現在

No.	郡市	学校数			内 訳							合 計
		本校	分校	計	文 部 科 学 省 指 定					県 準		
					4	3	2	1	準		特	
1	高 崎	2小 1中		2 1						2		2 1
2	安 中	1 1		1 1							1 1	1 1
3	多 野	2 2		2 2			1 2	1				2 2
4	甘 楽	1		1							1	1
5	吾 妻	9 5		9 5				3 2	1 1	2 1	3 1	9 5
6	沼 田	1 2		1 2				1 1				1 2
7	利 根	3 2		3 2				1 1		1 1	1	3 2
総	小 計	18 14		18 14			1 2	6 4	3 2	3 2	5 4	18 14
	計	32	0(0)	32	0	0	3	10	5	5	9	32

〈5〉複式学級の郡市別、編制別、学級一覧(小学校のみ)

平成29. 5. 1 現在

郡市	学年								学級数計	学校数
	1・2年	2・3年	3・4年	4・5年	5・6年	3・4・5年	4・5・6年			
高崎市	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
多野郡	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
吾妻郡	0	1	2	0	0	0	0	3	3	
沼田市	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
利根郡	0	0	1	0	0	0	0	1	1	
計	0	1	6	0	0	0	0	7	7	

〈6〉 級別へき地学校児童・生徒数の推移（小・中学校別）

<（ ）内は、休校中の学校である。>

年度	県準		特地		国準		1級		2級		3級		4級	計 (A)		県全体数 (B)		(A)/(B)%	
	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
昭50	36	18	9	2	13	3	31	7	4	1	3	0	0	96	31	313	176	30.7	17.6
昭51	36	18	8	2	12	3	30	7	4	1	2	0	0	92	31	319	173	28.8	17.9
昭52	36	18	8	2	12	3	29	7	3	1	2	0	0	90	31	324	172	27.8	18.0
昭53	36	18	8	2	12	3	29	7	3	1	2	0	0	90	31	330	172	27.3	18.0
昭54	37	18	8	2	12	3	27	7	3	1	2	0	0	89	31	337	173	26.4	17.9
昭55	36	16	7	2	12	3	25	7	3	1	2	0	0	85	29	339	172	25.1	16.9
昭56	36	17	7	2	12	3	24	5	3	1	2	0	0	84	28	342	172	24.6	16.3
昭57	36	17	7	2	11	3	21	6	3	1	2	0	0	80	29	345	174	23.2	16.7
昭58	35	17	7	2	11	3	20	6	3	1	1	0	0	77	29	347	176	22.2	16.5
昭59	34	17	7	2	11	3	20	6	3	1	1	0	0	76	29	349	180	21.8	16.1
昭60	32	17	7	2	11	3	20	6	3	1	1	0	0	74	29	349	184	21.2	15.8
昭61	31	16	7	1	10	3	19	6	3	1	1	0	0	71	27	348	183	20.4	14.8
昭62	31	16	7	1	10	3	19	6	2	1	1	0	0	70	27	366	187	19.1	14.4
昭63	31	16	10	1	9	3	17	5	2	1	1	0	0	70	26	368	185	19.0	14.1
平元	31	16	10	1	9	3	16	5	2	1	1	0	0	69	26	367	185	18.8	14.1
平2	16	5	8	4	13	4	24	9	2	2	1	1	1	65	25	365	183	17.8	13.7
平3	16	5	8	4	13	4	24	9	2	2	1	1	1	65	25	367	183	17.7	13.7
平4	16	5	8	4	13	4	24	9	2	2	1	1	0	64	25	366	183	17.5	13.7
平5	16	5	8	4	13	4	24	8	2	2	1	1	0	64	24	365	181	17.5	13.3
平6	16	5	8	4	12	4	23	8	1	2	1	1	0	61	24	363	181	16.8	13.3
平7	16	5	8	4	12	4	22	8	1	2	1	1	0	60	24	362	181	16.6	13.3
平8	16	4	10	5	11	4	21	8	2	2	1	1	0	61	24	362	181	16.9	13.3
平9	16	4	10	5	12	4	20	7	2	2	1	1	0	61	23	361	180	16.9	12.8
平10	15	4	10	5	12	4	20	7	2	2	(1)	(1)	0	60	23	359	180	16.7	12.8
平11	14	4	10	5	11	4	20	7	2	2	(1)	(1)	0	58	23	356	180	16.3	12.8
平12	14	4	10	5	11	4	18	7	2	1	(1)	(1)	0	56	22	355	179	15.8	12.3
平13	13	4	10	5	11	4	17	7	2	1	(1)	(1)	0	54	22	353	179	15.3	12.3
平14	12	5	8	3	14	4	16	7	1	1	(1)	(1)	0	52	21	352	179	14.8	11.7
平15	12	4	8	4	13	4	15	7	0	1	(1)	(1)	0	49	21	350	179	14.0	11.7
平16	12	3	8	4	13	3	11	6	0	1	(1)	(1)	0	45	18	347	176	13.0	10.2
平17	12	4	7	3	13	3	10	6	0	1	(1)	(1)	0	43	18	345	175	12.5	10.3
平18	12	4	7	3	13	3	10	6	0	1	(1)	(1)	0	43	18	345	175	12.5	10.3
平19	11	4	7	3	13	3	10	6	0	1	(1)	(1)	0	42	18	344	175	12.2	10.3
平20	10	4	6	3	12(1)	3	9	6	0	1	(1)	(1)	0	39	18	340	173	11.5	10.4
平21	10	4	6	3	12	3	9	6	0	1	(1)	(1)	0	38	18	340	171	11.2	10.5
平22	17	8	3	2	6	2	8	5	2	2	(1)	(1)	0	37	20	339	171	10.9	11.7
平23	14	7	3	2	6	2	7	5	2	2	(1)	(1)	0	33	19	333	169	9.9	11.2
平24	13	7	3	2	6	1	7	5	2	2	(1)	(1)	0	32	18	329	168	9.7	10.7
平25	10	7	2	2	6	1	7	5	2	2	(1)	(1)	0	28	18	324	168	8.6	10.7
平26	9	6	2	2	6	1	7	5	2	2	(1)	(1)	0	27	17	322	167	8.4	10.2
平27	8	5	2	2	6	1	6	4	1	2	(1)	(1)	0	24	15	318	164	7.5	9.1
平28	6	4	3	2	3	2	6	4	1	2	(1)	(1)	0	20	15	312	162	6.4	9.3
平29	5	4	3	2	3	2	6	4	1	2	0	0	0	18	14	308	161	5.8	8.7

II 平成29年度 群馬県へき地教育振興会役員

平成 29. 6. 30現在

会 長 星野巳喜雄 (沼田)

副会長 田村 利男 (多野：神流町長) 小林 靖能 (吾妻：吾妻郡町村教育委員会
千明 金造 (利根：片品村長) 連絡協議会会長)
理 事 飯野 眞幸 (高崎：高崎市教育長) 桑原 幸正 (安中：安中市教育長)
山田 孝行 (多野：神流町教育長) 碓井 良一 (甘楽：南牧村教育長)
小林 靖能 (吾妻：吾妻郡町村教育委員会 星野巳喜雄 (沼田)
連絡協議会会長)
千明 金造 (利根：片品村長)

評議員

郡 市	町 村	評 議 員
高 崎 市		飯 野 眞 幸 (教育長)
安 中 市		桑 原 幸 正 (教育長)
多 野 郡	上 野 村	黒 澤 右 京 (教育長)
	神 流 町	山 田 孝 行 (教育長)
甘 楽 郡	南 牧 村	碓 井 良 一 (教育長)
吾 妻 郡	中之条町	宮 崎 一 (教育長)
	長野原町	市 村 隆 宏 (教育長)
	嬬恋村	黒 岩 優 行 (教育長)
	草津町	中 澤 隆 (教育長)
	高山村	山 口 廣 (教育長)
	東吾妻町	小 林 靖 能 (教育長)
沼 田 市		大 竹 孝 夫 (教育長)
利 根 郡	片 品 村	吉 野 隆 哉 (教育長)
	昭 和 村	吉 澤 博 通 (教育長)
	みなかみ町	増 田 郁 夫 (教育長)

監 事 市 村 隆 宏 (吾妻：長野原町教育長) 吉 野 隆 哉 (利根：片品村教育長)

平成29年度 へき地教育振興会事務局及び郡市町村事務担当者・担当指導主事

事務局 書記・会計 武川 光 ・ 帖佐 一

市町村	連 絡 先	事務担当者	へき地担当指導主事
高 崎 市	高崎市教育委員会	塚 越 英 男	中 澤 伸 一 (西部教育事務所)
安 中 市	安中市教育委員会	城 田 敬 子	
上 野 村	上野村教育委員会	黒 澤 二 郎	
神 流 町	神流町教育委員会	齋 藤 朋 美	
南 牧 村	南牧村教育委員会	小 池 悦 子	市 村 武 文 (吾妻教育事務所)
中之条町	中之条町教育委員会	矢 嶋 将 之	
長野原町	長野原町教育委員会	佐 藤 忍	
嬬恋村	嬬恋村教育委員会	滝 沢 勇 司	
草津町	草津町教育委員会	櫻 田 菜 穂	
高山村	高山村教育委員会	鈴 木 啓 三	
東吾妻町	東吾妻町教育委員会	猪 野 拓 郎	眞 下 理 江 (利根教育事務所)
沼 田 市	沼田市教育委員会	金 子 平	
片 品 村	片品村教育委員会	萩 原 美千代	
昭 和 村	昭和村教育委員会	綿 貫 寿美子	
みなかみ町	みなかみ町教育委員会	小 倉 正 人	

Ⅲ 平成29年度 群馬県へき地教育研究連盟役員

役員

- ・理事長 飯塚真琴（甘楽：南牧村立南牧小学校）
- ・副理事長 小池政一（高崎：高崎市立倉渕小学校）
地田功一（吾妻：嬭恋村立嬭恋中学校）
小林彦名（沼田：沼田市立多那小中学校）
- ・常任理事 角田栄寿（吾妻：草津町立草津中学校）
高桑実（利根：片品村立片品中学校）
- ・事務局長 黒澤守（多野：神流町立万場小学校）
- ・会計部長 畑光代（安中：安中市立松井田北中学校）
- ・理事

ブロック 郡市	氏名	勤務校	勤務校所在地（電話番号）	備考
A 高崎 安中 多野 甘楽	飯塚真琴	南牧村立南牧中学校	甘楽郡南牧村大日向 1045 (0274-87-2501)	理事長
	小池政一	高崎市立倉渕小学校	高崎市倉渕町権田 314-1 (027-378-3218)	副理事長 研究部長
	黒澤守	神流町村立万場小学校	多野郡神流町万場 84-2 (0274-57-2320)	事務局長
	黒澤栄生子	上野村立上野中学校	多野郡上野村檜原 113 (0274-59-2040)	
	畑光代	安中市立松井田北中学校	安中市松井田町上増田 3602-1 (027-393-1520)	会計部長
B 吾妻	地田功一	嬭恋村立嬭恋中学校	吾妻郡嬭恋村大笹 1654-2 (0279-96-0009)	副理事長
	角田栄寿	草津町立草津中学校	吾妻郡草津町草津 464-27 (0279-88-2227)	調査部長
	牛木雅人	高山村立高山小学校	吾妻郡高山村中山 2792-1 (0279-63-2001)	
	松本聡	東吾妻村立岩島小学校	吾妻郡東吾妻町岩下 46 (0279-67-2039)	
	中沢博	中之条町立六合中学校	吾妻郡中之条町生須 543-1 (0279-69-2005)	

C 利根 沼田	小林 彦名	沼田市立多那小中学校	沼田市利根町多那 732 (0278-53-2919)	副理事長
	高桑 実	片品村立片品中学校	利根郡片品村鎌田 4480 (0278-58-2019)	総務部長
	登坂 一彦	沼田市立利根中学校	沼田市利根町追貝 334 (0278-56-2044)	
	樋口 徹	片品村立片品小学校	利根郡片品村鎌田 3952 (0278-58-3126)	
	荒木富美子	昭和村立大河原小学校	利根郡昭和村大字糸井 5455-354 (0278-24-7166)	
「板木」 実務 担当	松本 聡	東吾妻村立岩島小学校	吾妻郡東吾妻町岩下 46 (0279-67-2039)	

IV 平成29年度 群馬県へき地教育センター指導員

センター名	氏 名	勤 務 先	勤務校所在地（電話番号）
吾 妻	小野塚 則幸	長野原町立第一小学校内	〒377-1309 吾妻郡長野原町大字林1394-5 (0279-82-2145)
利 根	笛田 敏行	利根教育事務所内	〒378-0031 沼田市薄根町4412 (0278-23-0165)

V 平成29年度へき地教育功労者

No.	氏 名	功績の概要
1	いいで てつお 飯出 哲夫 上野村教育委員会推薦	平成29年3月に上野村立上野中学校校長として退職するまで、多野郡内のへき地学校に30年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
2	くろいわ のぶよし 黒岩 伸吉 中之条町教育委員会推薦	平成29年3月に中之条町立六合小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に22年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
3	しのはら ともひこ 篠原 智彦 長野原町教育委員会推薦	平成29年3月に長野原町立中央小学校校長として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に16年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
4	はちすか かつあき 蜂須賀 克明 長野原町教育委員会推薦	平成29年3月に長野原町立北軽井沢小学校校長として退職するまで、利根・吾妻管内のへき地学校に18年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
5	たかはし こ 高橋 あつ子 長野原町教育委員会推薦	平成29年3月に長野原町立中央小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に18年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
6	たかはし えいこ 高橋 詠子 長野原町教育委員会推薦	平成29年3月に長野原町立東中学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に16年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
7	かとう つねよ 加藤 恒世 長野原町教育委員会推薦	平成29年3月に長野原町立応桑小学校養護教諭として退職するまで、高崎・吾妻管内のへき地学校に15年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
8	すか みちお 須賀 道郎 嬭恋村教育委員会推薦	平成29年3月に嬭恋村立西部小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に35年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
9	もぎ みどり 茂木 みどり 嬭恋村教育委員会推薦	平成29年3月に嬭恋村立東部小学校主幹事務長として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に19年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
10	みやした まさゆき 宮下 昌之 嬭恋村教育委員会推薦	平成29年3月に嬭恋村立東部小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に33年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
11	くろいわ じゅん 黒岩 順 嬭恋村教育委員会推薦	平成29年3月に嬭恋村立東部小学校教諭として退職するまで、吾妻郡内のへき地学校に17年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
12	こばやし たかよし 小林 高義 沼田市教育委員会推薦	平成29年3月に沼田市立沼田東小学校校長として退職するまで、利根・吾妻管内のへき地学校に16年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。

No.	氏 名	該当する内規・功績の概要
13	はやし かずひこ 林 一彦 沼田市教育委員会推薦	平成29年3月に沼田市立沼田中学校統括補佐事務長として退職するまで、利根郡内のへき地学校に16年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
14	よしの よしえ 吉野 良江 沼田市教育委員会推薦	平成29年3月に沼田市立沼田東小学校教諭として退職するまで、利根郡内のへき地学校に16年間にわたり勤務し、へき地教育に尽くした。
15	よしの たかや 吉野 隆哉 片品村教育委員会推薦	平成25～28年度の間、全国へき地教育研究連盟副会長、全国へき地教育連盟会長を歴任し、第63回全国へき地教育研究大会群馬大会において実行委員長を務めるなど、へき地教育に尽くした。

あ と が き

群馬県へき地教育資料「板木」第66集の発刊にあたり、ご指導下さいました群馬県教育委員会の皆様をはじめ、ご協力いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

「板木」は、昭和27年に群馬県へき地教育の資料集として第1号が創刊され、以来途切れることなく刊行されてきました。この間、多くの方々のご努力により、群馬県におけるへき地教育の歩みを示す貴重な資料として活用され、その価値を確かなものとしています。

今年度は、第66回群馬県へき地教育研究大会が安中市立松井田北中学校及び安中市立細野小学校で開催されました。午前は、全体会と班別研究協議、午後からは、公開授業及び授業研究会が行われ、へき地教育についての考えを深める貴重な機会となりました。そこで紹介されたへき地のよさを生かした学校経営や公開授業とともに、学習指導・生徒指導の実践、第66回全国へき地教育研究大会（高知大会）の報告等もこの「板木」に掲載させていただきました。各校の教育実践の参考にしていただければ幸いです。へき地教育の推進を図っていく一方で、児童生徒数の減少により、へき地校の状況は厳しくなっていますが、みんなで力を合わせ、へき地教育を盛り上げていきたいものです。

今年度も、へき地教育に携わる多くの方々から、原稿執筆や編集等のご協力をいただき、無事にへき地教育の記録を残すことができました。心からお礼申し上げます。完成した「板木」第66集が、今後のへき地教育推進の資料としてより多くの方々に活用されることを願っております。

なお、「板木」作成に携わった編集委員は、以下の通りです。

群馬県教育委員会事務局	鈴木 佳子（義務教育課長）
	春田 晋（義務教育課 教科指導係長）
	武川 光（義務教育課 教科指導係 指導主事）
	帖佐 一（義務教育課 教科指導係 指導主事 板木担当）
群馬県へき地教育研究連盟	飯塚 真琴（県へき連 常任理事・理事長）
	小池 政一（県へき連 常任理事・副理事長・研究部長）
	地田 功一（県へき連 常任理事・副理事長）
	小林 彦名（県へき連 常任理事・副理事長）
	黒澤 守（県へき連 常任理事・事務局長・総務部）
	高桑 実（県へき連 常任理事・総務部長）
	角田 栄寿（県へき連 常任理事・調査部長）
	畑 光代（県へき連 常任理事・会計部長・総務部）
	登坂 一彦（県へき連 理事・研究部・広報担当）
	荒木富美子（県へき連 理事・総務部・新聞担当）
	樋口 徹（県へき連 理事・監査・調査部）
	牛木 雅人（県へき連 理事・研究部）
	中沢 博（県へき連 理事・監査・総務部）
	黒澤栄生子（県へき連 理事・調査部・図書担当）
	松本 聡（県へき連 理事・調査部・板木担当）